

国語の試験問題の出題形式に関する比較研究

鈴木 規夫*

山田 文康**

池田 輝政***

赤木 愛和*

これは、「大学入試問題形式の改善に関する研究」の第1年度として、平成元年度に行われた国語、数学、英語の3教科の中の国語に関する研究報告である。

研究の目的は、多肢選択式と記述式の出題形式の違いによって、解答結果にどのような差異が生じるかを調べることにある。このため、等質と想定される2群の集団に多肢選択式と記述式からなる2種のテスト（問題Aと問題B）を受験させ、分散分析や相関分析といった統計的諸手法やテスト特性曲線等によって分析を試み、あわせて項目分析により内容を吟味した。分析の結果、以下の点が明らかになった。

1. テスト全体あるいは領域別にみた場合の多肢選択式と記述式の比較

記述式テストは多肢選択式に比べ難しい。しかし、識別性の点からいえば両形式共よく似た性質をもっていることが分かった。つまり、両形式のテストを受験した場合、多肢選択式の方が記述式に比べ正答率は高くなるが、高くなるその割合は成績の高低に拘わらずほぼ一定であると言える。これを領域別にみると、漢字、現代文あるいは古文のいずれの領域においても、テスト全体の傾向を保持し、記述式は多肢選択式に比べ難しいが、識別性という点では両形式ともよく似た性質をもっていることが分かった。

2. 項目レベルでみた多肢選択式と記述式との比較

さらに項目別にみた場合、漢字については、易しい漢字であれば、多肢選択式であろうとも記述式であろうとも、ほぼ全ての者が解答でき、識別性はほとんどない。しかし、やや難しい漢字の場合、両形式共識別性は高まり同じ性質をもてくることが分かった。

現代文の場合、正答が短い語句で答えさせる場合は、漢字と同じ特性を示す。これに対し、指示文によって正答を本文から探し出すような設問の場合、それが両形式においてほぼ類似したものであれば、正答率の差は指示文と正答文の所在する段落の異同によって大きく変動し、かつ同程度の識別力をもっていることが分かった。しかし、記述式で解答方法を一部変更した場合には、記述式は多肢選択式に比べ識別性が低くなることもあり、書き換え方に留意する必要があることも分かった。

古文の場合、ほぼ全ての項目で多肢選択式の方が記述式よりも正答率は高くなる。しかし、識別性の点では両形式間でほとんど差がなかった。

* 大学入試センター研究開発部 評価・追跡研究部門

** 大学入試センター研究開発部 情報処理研究部門

*** 大学入試センター研究開発部 試験制度研究部門

大学入試センター研究紀要 No. 20, 1991, p.1~45 (平成3年1月9日受付)

© 1991 THE NATIONAL CENTER FOR UNIVERSITY ENTRANCE EXAMINATION

I. 研究の目的

国公立大学志願者に対する共通1次試験に代り、一部の私立大学も参加した大学入試センター試験も平成元年から始まった。共通1次試験で行われていた多肢選択式による客観テストはそのまま引き継がれることとなり、多肢選択式テストは大学入学者選抜方法として今後も重要な役割を担うことになる。このため、多肢選択式テストと記述式テストがそれぞれ、受験生のどのような能力まで測ることができ、どのような能力については測りにくいかなど、その特性を実証的に明らかにし、両者の役割分担について知見を得ておくことは重要な課題である。課題に関する先行研究としては、松井他(1984)がある。そこでは、物理の試験問題について多肢選択式と記述式の両テストを課し、その解答結果の関連の分析を試みている。この場合の実験計画は、同一被験者に対して多肢選択式または記述式の一方を先に解答させ、答案を回収した後、他の方式による解答を要求する方法であった。このため、先に解答したテストに対する学習の影響が除去できないという問題が残された。

本研究における実験計画では、統計的に等質と考えられる異なった集団にそれぞれのテストを別個に課し、その結果を既に確立されている統計手法によって分析を試みるもので、両テストの長所と短所について、実証的により厳密な成果が得られると考えられる。分析では、総得点や出題領域ごとにみた分析のみならず、項目別にみた正誤の内容も調べ、多肢選択式と記述式の解答形式の差異について検討する。

II. 実験計画の設計とテストの実施

1. 実験計画の設計

研究の目的は、多肢選択式と記述式の解答形式の違いで解答結果にどのような差異が生じるかを調べることにある。この目的を達成するためには、厳密には、「被験者が同一問題を多肢選択式と記述式の両方に解答する」ことが望まれるが、同一問題なので先のテストの解答が後のテストの解答に影響することは避けられず、こうした実験計画は採用しなかった。そこで、本研究においては次のような実験計画を策定することにした。

2群の集団が学力において等質であると仮定し、一方の群(P1)に対しては、問題Aの多肢選択式と問題Bの記述式を解答させ、他方の群(P2)に対しては、問題Aの記述式と問題Bの多肢選択式を解答させる。その際、問題Aと問題Bはほぼ並行なテストとして作成する。(表1)

2. 2群の集団: P1とP2

実験計画に基づき、被験者として都内の4大学(TJ, GK, TD, DT)から1年生を449人募集した。これらの被験者を各群の集団が学力において等質であるように2群(P1, P2)に分けた。具体的には、各大学毎に被験者をほぼ等人数になるようランダムに振り分けた。その結果、実際に受験した者は、表2に示す通り計383人となった。

3. 試験問題: 問題Aと問題B

ほぼ平行と思われる試験問題を問題Aと問題Bとして2種類用意した。それらの試験問題は、昭和61年度および昭和63年度に出題された共通1次試験の国語の中から一部を

表1 実験計画

集団	多肢選択式	記述式
P 1	問題 A (A 選)	問題 B (B 記)
P 2	問題 B (B 選)	問題 A (A 記)

表2 被験者数

集団	T J	G K	T D	D T	計
P 1	33	91	43	24	191人
P 2	33	92	48	19	192人

表3 問題 A と問題 B の出題

大問	領域	問題 A		問題 B	
		内容	項目数	内容	項目数
1	1	漢字	5	漢字	5
	2	現代文	6	現代文	6
2	3	古文	8	古文	9

取り上げ、再構成したものである。

問題 A：昭和 63 年度に出題された大問 1
(現代文・子規) および大問 2 (古
文・西行)
問題 B：昭和 61 年度に出題された大問 1
(現代文・近代化) および大問 2 (古
文・小式部)

4. 解答形式：多肢選択式と記述式

ここでは、上に示した問題 A と問題 B に
ついてそれぞれ多肢選択式と記述式の 2 つを
用意した。多肢選択式は、共通 1 次試験問題
の一部をそのまま利用し、記述式は、その多
肢選択式の問題を書き直したものである。

5. 記述式問題の作成に関する基本方針

国語のテスト問題は、多肢選択式にしる記

述式にしろ、(1) 問題文 (素材)、(2) 設問文、(3) 解答形式の各要素からなる。このなかで多肢選択式と記述式で決定的に違うのは、言うまでもなく(3)の解答形式である。多肢選択式は与えられた選択肢を比較し正解を選ぶ解答形式であり、記述式は与えられた設問文の指示に従って正解を表現するという解答形式である。「選ぶ」という過程と「表現する」という過程とを比べると、正解する確率は一般的には後者の方が低くなると考えられる。したがって、同じテスト問題によって多肢選択式と記述式とを比較する場合には、解答形式の違いがテスト問題の難易に影響を与える点を充分に注意する必要がある。

国語班はこのような認識にたつて、多肢選択式から記述式の書き直しに当たって、出題の意図と難易が違わないようにするために、以下のような点を基本方針とした。

(1) 問題提示文 (素材) 自体は多肢選択式と同一にする。

共通 1 次試験の国語の問題文は、現代文の分野から ① 評論文と ② 小説のジャンル、そして ③ 古文と ④ 漢文の各分野が

出題されている。このなかから、現代文の分野の評論文、そして古文を選んで、多肢選択式と記述式の共通の問題文とした。

(2) 出題の意図は変えないようにしながら、設問文に手を加える。これは解答形式に由来する難易の影響をできるだけ少なくするために行う。

設問文には、設問の意図と解答の指示が盛られている。設問の意図と対応する設問番号は以下のように整理した。この設問の意図の部分は変えないで、解答の指示の部分を変える。すなわち、記述式によって解答が難しくなると予想できる場合は、何らかのヒントを付加したりして、正解を構成するのを容易にする。

(3) 解答形式では、多肢選択式の場合 5 肢択 1 方式がほとんどであるが、問題 A の問 6 だけは 7 肢択 2 方式をとっている。一方、記述式の場合、個人の表現力 (あるいは書く力) の差を正解に反映させないようにするために、問題文の語句を使わせたり、文中から該当箇所を抜き出させる等の方法を採用した。こうすれば正解も限定できて、採

表 4 問題 A と問題 B の出題内容

摘 記	問題 A		問題 B	
	大問 1	大問 2	大問 1	大問 2
① 漢字の知識	問 1		問 1	
② 語句の知識	_____	問 1	_____	問 1
③ 文法知識	_____	問 2、問 5	_____	問 7
④ 文・語句の説明	問 2、問 4 問 5、問 7	問 3、問 4	問 5、問 6	問 2、問 3
⑤ 文脈の読み取り・ 論理的関連づけ	問 3、問 6	問 6	問 2、問 3 問 4	問 4、問 5 問 6、問 8
⑦ 主題の要約	_____	_____	問 7	

点が容易になる。

(4) 採点方法について

記述式の採点については、当初は部分点を与えない方針を採って行った。しかし、項目単位に実際の正答率の結果をみて、多肢選択式が記述式に比べて正答率にかなりの

差があった場合には、部分点を与えるように調整することに変更した。その結果について、項目ごとに与えた部分点を表5に示す。

表5 採点基準

	項 目			配点	与えた部分点
問題 A	A7	第 3 問		5 点	3 点
	A8	1 問 4		6 点	1 点、3 点、4 点
	A9	問 5		5 点	2 点、3 点、4 点
	A10	問 6		6 点	3 点、4 点
	A12	問 1 (ア)		3 点	1 点、2 点
	A13	問 1 (イ)		3 点	1 点、2 点
	A14	第 1 問 (ウ)		3 点	1 点、2 点
	A15	2 問 2		6 点	2 点、4 点、5 点
	A16	問 3		6 点	1 点、3 点、4 点、5 点
	A17	問 4		6 点	2 点、3 点
	A18	問 5		6 点	5 点
問題 B	B7	問 3		7 点	1 点、2 点、3 点、4 点、5 点、6 点
	B8	第 4 問		5 点	2 点、3 点
	B9	1 問 5		5 点	3 点
	B10	問 6		6 点	3 点
	B11	問 7		7 点	2 点、4 点、5 点、6 点
	B12	問 1 (ア)		4 点	2 点
	B13	問 1 (イ)		4 点	1 点、2 点、3 点
	B14	問 2		5 点	3 点
	B15	第 3 問		5 点	1 点、2 点、3 点、4 点
	B16	2 問 4		5 点	1 点、2 点、3 点、4 点
	B17	問 5		5 点	1 点、2 点、3 点、4 点
	B18	問 6		5 点	3 点
	B19	問 7		4 点	1 点、2 点、3 点
	B20	問 8		5 点	4 点

6. 国語テストの実施

表6 国語テストの実施

国語	第1試験 (50分)	第2試験 (60分)
時間	15:30 ~ 16:20	16:30 ~ 17:30
P 1	A 多肢選択式	B 記述式
P 2	B 多肢選択式	A 記述式

III. 分析内容

1. 多肢選択式と記述式のテスト特性（難易度や識別性）の比較

2元配置の分散分析（試験問題×解答形式）や解答形式別にみたテスト特性曲線によって、解答形式の違いに関する主効果や識別性について検討する。

2. 領域レベルでの試験問題と解答形式の違いに関する検討

ここでいう領域とは、テストの内容によっ

て「漢字の書き取り」、「現代文（評論文）」、「古文」の3つに分類したものをいう。ここでは、これらの領域別に検討を加える。また、領域間の相関分析を行い、領域レベルでの多肢選択式と記述式との間の関連について検討する。

3. 項目レベルにおける分析

項目正答率および項目特性曲線を利用して、多肢選択式と記述式とで反応パターンがどのように異なるかを検討する。

IV. 試験問題全体及び領域別に見た多肢選択式と記述式の特徴の比較

1. 2群の被験者集団間の等質性の検討

実験計画の項でも述べたように、本研究では、被験者を学力に関して互いに等質と思われる2つの群（P1, P2）に分けた。この2群の等質性は、本実験計画における大前提であり、これが損なわれた場合には、以下の分析に複雑な補正が必要となる。そこで、多肢選択式と記述式の比較に入る前に、2群の等質性について検討を加えておく。

表7 被験者群間のt-検定

	T J	G K	T D	D T	全員
自由度	64	181	89	41	381
t	1.729	1.633	2.839 **	0.269	2.580 *
人数	33 33	91 92	43 48	24 19	191 192
平均点	146.26 135.97	135.36 128.92	158.98 147.08	119.86 117.70	140.61 133.56
標準偏差	25.14 23.20	27.76 25.55	17.68 22.24	21.49 29.18	27.31 26.18

*水準5%で有意 **水準1%で有意

上段（A選択式、B記述式）被験者（P1群）

下段（B選択式、A記述式）被験者（P2群）

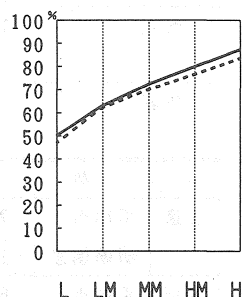
そのために、4種のテスト、A選、B記、B選、A記の満点をそれぞれ100点とするように調整した後、P1群(A選B記)ではA選とB記の合計点(200点満点)、P2群(B選A記)ではB選とA記の合計点(200点満点)を求め、t-検定を行って2つの集団間の平均値の差の有無を検討した(表7)。

その結果、TD群を除く3小群では有意差が認められなかったものの、TD群で平均値に1%水準で有意差が認められ、さらに全体としても5%水準で有意差が認められた。つまり、平均値に関しては、全体としてP1群がP2群よりやや高くなる傾向が見え、国語の学力に関して2つの集団は必ずしも等質でない可能性が示唆された。しかし、このことには、本研究で用いた実験計画が関連していることに注意する必要がある。つまり、P1、P2群ともに、問題A、Bの2種類の試験を受験しているが、それらは解答形式(多肢選択式、記述式)において異なっている。従って、2群の平均値の差異は、試験問題の差異に起因していると考えられることのできる。その意味で、本研究の手続きでは、2群の等質性を厳密に検証することは不可能である。しかし、少なくとも2群の等質性に関しては、その手続きに十分な注意を払ったこと、そして実際、2つの群の合計点における差異は、4つの小群に共通して現れていることなどから、以下の分析で2つの被験者集団間の等質性を仮定することにそれほど問題ないと思われる。なお、これについては次項でさらに述べる。

次に、以上の傾向を、合計点で層別した被験者群についてみたのが図1である。図1は、各被験者群ごとに、合計点によって受験者を互いにほぼ人数の等しい5つの群に分け、その群ごとの合計点の平均得点率を結んだものである。図によれば、先に述べたようにP1群(実線)がP2群(点線)よりも若干上に位置

図1 解答者の総得点の特性

— (A選+B記)解答者
... (B選+A記)解答者



している傾向が認められる。しかも、その差は、合計点で層別された被験者群間においても、ほぼ同様に現れており、図1の2本の線の形状はよく似ている。つまり、2つの群が受験した試験問題は、その難易度の点に関しては若干異なるが、識別力に関しては同じような特性をもっていることがうかがえる。

2. 問題内容・解答形式間の2要因分析

前項で用いた100点満点の得点を利用して、問題内容(A・B)、解答形式(多肢選択式・記述式)の2要因計画による分散分析を行った(表8)。

その結果、まず内容に関しては、GK群では1%水準で有意差が認められ、さらに全体でも1%水準で有意差が認められた。つまり、全体としては、2つの問題内容(A・B)は必ずしも等質でないと思われる。表8によれば、多肢選択式において問題Aの平均値が問題Bよりも高く現れる傾向は、全ての小群、そして集団全体に共通している。ただし、記述式における2つの内容の差には小群間で一定した傾向が見られず、しかもその差も小さい。つまり、2つの問題内容の差異は、主として多肢選択式における差異によるものと思われる。

表 8 問題内容と解答形式の 2 要因分散分析

		T J	G K	T D	D T	全員
受験者		2.99	2.67	7.86 **	0.08	6.66 *
形式		15.61 **	71.99 **	90.15 **	22.34 **	177.84 **
内容		1.93	20.60 **	0.31	2.44	17.10 **
人 数		33	91	43	24	191
A 選	平均点	77.64	74.85	85.28	68.85	76.93
	標準偏差	14.35	16.32	11.41	13.11	15.38
B 記	平均点	68.62	60.52	73.70	51.01	63.69
	標準偏差	13.55	15.42	10.14	14.10	15.57
人 数		33	92	48	19	192
B 選	平均点	70.15	66.63	80.05	63.34	70.26
	標準偏差	16.11	14.91	14.03	19.43	16.39
A 記	平均点	65.82	62.29	67.02	54.36	63.29
	標準偏差	11.15	14.37	11.24	16.08	13.71

*水準 5% で有意 **水準 1% で有意

解答形式に関しては、全ての小群、そして全体でも 1% 水準で有意差が認められた。その平均値の差異からも明らかなように、記述式は多肢選択式と比較してより難しいとの傾向が明確に現れている。

また、受験者については、全体集団で 5%、TD 群において 1% 水準で有意差が認められる。表 7 と同じ傾向である。ただし、前項では、受験者を分割する手続きの厳密性等から考えて、2 群間の差異が受験者によるものではなく、試験問題（形式×内容）の差異による可能性が大きいことを述べた。つまり、この実験計画では、受験者は形式と内容が相互に作用するように問題を解答しており、従って、受験者の主効果を形式×内容の交互作用の効果と考えることもできるのである。そこで、交互作用の観点から表 8 の各平均点を検討すると、問題 A は問題 B と比較して、多肢

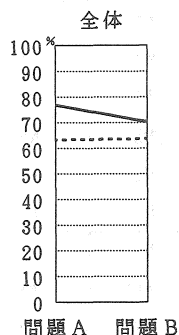
選択式から記述式への書換えによって難易度がより高まった傾向が認められる。例えば、全体集団における問題 B の多肢選択式と記述式の差は 7 点弱なのに対して、問題 A では 14 点弱とほぼ 2 倍である。先に述べた、平均点に関して P1 群が P2 群より高くなる傾向は、P2 群が、書換えによって難易度のより高まった A 記を受験したことによるものと考えられる。

以上の傾向を図として示したのが、図 2 である。多肢選択式より記述式の方が難易度が高いこと、多肢選択式では問題 B の難易度が高いが、記述式に変換された状態では 2 つの問題間の差が小さくなっていることが読み取れる。

次に、図 1 と同様に合計点で層別した被験者群についてみたのが図 3（解答形式の比較）、図 4（問題内容の比較）である。図 3 に

図2 多肢選択式と記述式の正答率の特性

— 多肢選択 ... 記述



における実線（多肢選択式）と点線（記述式）との差が、図4の実線（問題A）と点線（問題B）との差と比較して極めて大きいこと、図3で多肢選択式が記述式より上に位置していること等が明確に読み取れる。しかもその差異

は、合計点で層別された受験者群間でもほぼ一定していることがわかる。つまり、図3、図4の各図における2本の線は似た形状を示しており、テストの特性、特に識別力に関しては、多肢選択式と記述式、そして問題AとBで良く似た性質をもっていることが示唆される。

3. 領域ごとの問題内容・解答形式間の比較

A 選, B 記, B 選, A 記の各領域の配点をすべて100点満点にそろえ、分散分析（試験問題×解答形式）を行った（表9）。なお、国語で用いた領域は、領域1が漢字、領域2が現代文、領域3が古文である。また、領域別の平均値・標準偏差を表10に、それを図として表現したものを図5に示す。

まず、領域1（漢字）に関しては、表9によ

図3 多肢選択式と記述式正答率の特性

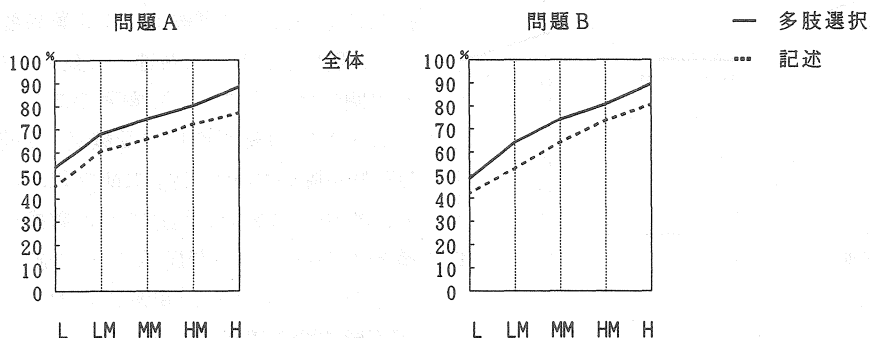


図4 問題Aと問題Bの正答率の特性

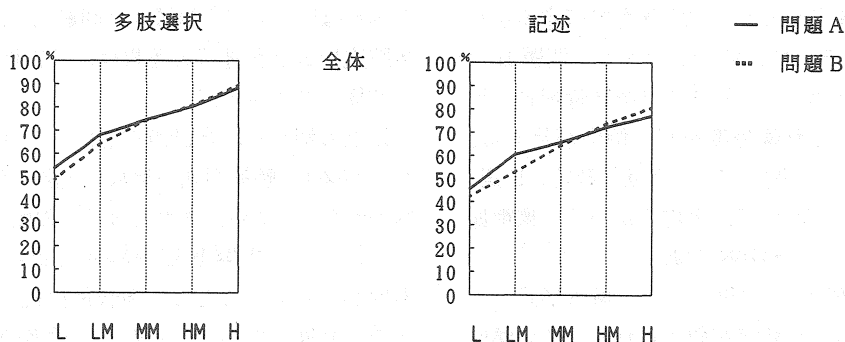
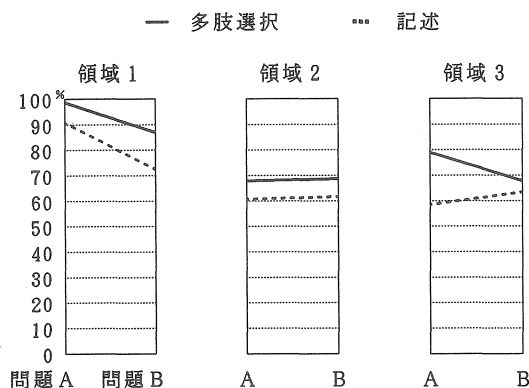


表9 領域別分散分析

		T J	G K	T D	D T	全員
1	受験者	NS	**	NS	**	**
	形式	**	**	**	**	**
	内容	**	**	**	**	**
2	受験者	NS	NS	NS	NS	NS
	形式	NS	*	**	NS	**
	内容	NS	NS	*	NS	NS
3	受験者	**	**	**	NS	**
	形式	**	**	**	**	**
	内容	NS	*	NS	NS	**
人数	A選 B記	33	91	43	24	191
	B選 A記	33	92	48	19	192

NS 有意差無し, *水準 5% で有意, **水準 1% で有意

図5 領域別にみた多肢選択式と記述式の正答率



れば、全ての小群そして全体集団において、問題内容、解答形式とも 1% 水準で有意差が認められる。そして、表 10 によれば、問題 B は問題 A と比較して、記述式は多肢選択式と比較してそれぞれ難易度が高い傾向が見える。また、領域 1 に関しては、A 選、B 記、B 選、A 記の全てにおいて、平均点が高く、標準偏差が小さいことが特徴である。

領域 2 (現代文) に関しては、解答形式の方により多くの有意差が認められる。この傾向

は、領域 3 (古文) においても同様であるが、解答形式における有意差は、全体集団、各小群全て 1% 水準で検出されており、その差異は領域 2 と比較してより明確である。多肢選択式の記述式への書換えによる難易度の高まりは、現代文、古文に共通して認められるが、その傾向は古文において顕著である。さらに、形式×内容の交互作用(受験者)の効果が、DT 群を除いて全て 1% 水準で認められており、表 10 によれば、記述式への書換えによる難易度の高まりは問題 A の方に強く現れている。図 2 に示された問題 A における 2 つの解答形式間の差異の大きさは、主として領域 3 によることが示唆される。そのことは、図 5 をみれば明らかで、領域 3 の問題 A における多肢選択式と記述式の差異は、その他と比較して極めて大きい。

以上の傾向を、合計点で層別して詳しくみたのが図 6 (解答形式の比較) と図 7 (問題内容の比較) である。まず、漢字(領域 1)についてみると、内容 B が内容 A と比較して難易度がより高いことは、多肢選択式でも記述式でも共通している。しかし、両者の差異は

表 10 領域別得点率の平均および標準偏差

	領域	T J		G K		T D		D T		全員	
		平均	偏差	平均	偏差	平均	偏差	平均	偏差	平均	偏差
A 選	1	99.4	3.5	98.7	5.0	99.1	4.3	96.7	7.6	98.6	5.0
	2	67.8	22.2	66.5	22.6	74.3	18.4	62.2	21.2	67.9	21.7
	3	80.4	19.7	75.8	21.5	91.1	12.7	67.3	22.0	79.1	20.8
B 記	1	71.5	23.5	70.1	21.6	86.5	15.6	56.7	18.3	72.4	22.1
	2	65.3	17.2	59.0	20.2	66.5	15.4	57.4	15.8	61.6	18.4
	3	70.7	17.1	59.5	19.9	76.6	14.1	44.3	21.6	63.4	21.0
人 数		33		91		43		24		191	
B 選	1	84.8	14.2	85.0	14.7	94.6	9.0	81.0	12.4	87.0	13.8
	2	68.7	22.6	64.5	20.3	77.1	18.7	66.3	29.2	68.6	21.8
	3	67.8	20.9	64.0	18.6	79.0	17.4	56.6	22.9	67.7	20.3
A 記	1	84.2	17.1	92.0	11.1	92.9	9.7	90.5	10.3	90.7	12.3
	2	65.3	16.8	61.7	17.4	59.2	16.7	52.0	16.8	60.7	17.3
	3	61.5	19.5	55.2	22.0	67.0	16.6	47.1	24.4	58.4	21.4
人 数		33		92		48		19		192	

多肢選択式より記述式において大きく現れている。つまり、漢字に関しては、多肢選択式で難易度の高い問題ほど、記述式に変換されることによる難易度の高まりがより大きいことを示唆しているものと思われる。

領域 2 (現代文) の多肢選択式については、図 7 から、合計点の中範囲において問題 A の方が若干難易度が高い傾向が見える。また、内容 A に関しては、記述式への書換えによる難易度の高まりは、特に得点の高い層で大きく現れており、結果として、記述式の問題の識別力は、得点の高い層で低くなる傾向がみえる (図 6)。

領域 3 (古文) の多肢選択式については、図 7 から問題 B の方が難易度がより高い傾向がみえるが、識別力 (グラフの形状) に関しては 2 つの問題で差異は見出せない。しかも、この難易度の差異も記述式に変換された段階ではほとんど消えており、難易度、識別力に関して 2 つの問題には大きな差はみられない。

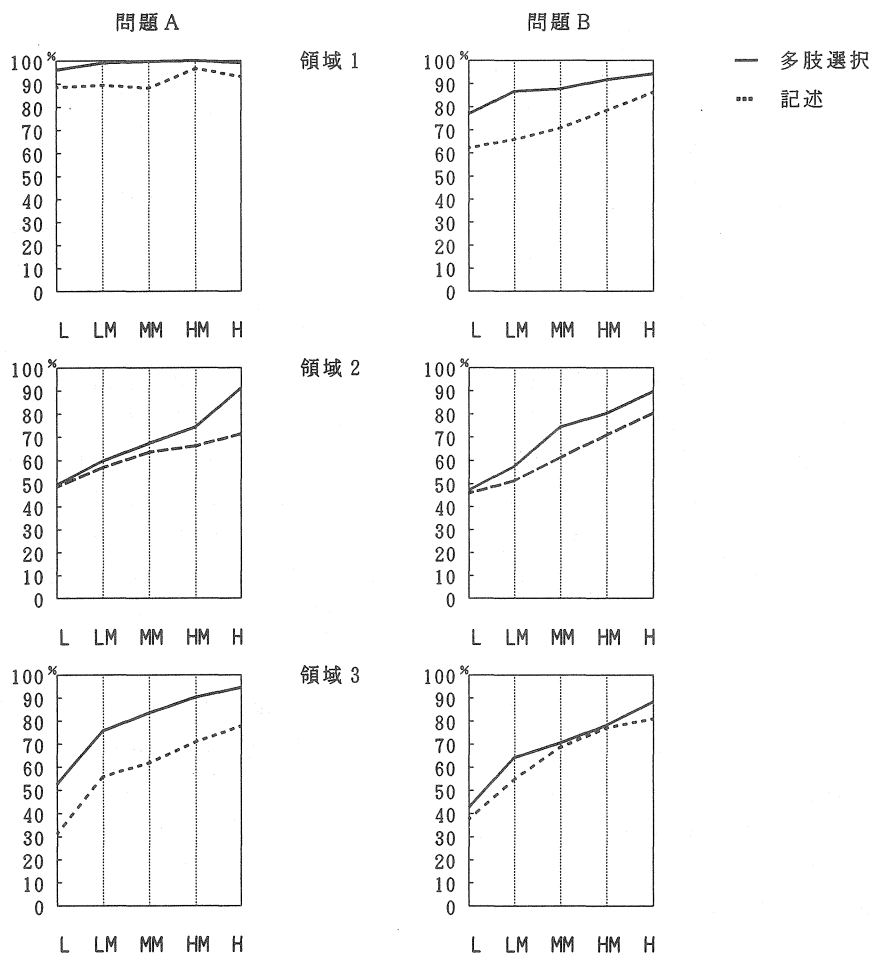
また、問題 A における多肢選択式から記述式への書換えによる難易度の高まりは極めて大きいですが、それは合計点の各層で共通して見られ、そのグラフの形状は、両者でほとんど変化は見られない。

4. 相関分析

多肢選択式問題の合計点と記述式問題の合計点との相関係数を表 11 に示す。多肢選択式と記述式の相関は、両群とも 0.5 程度である。この傾向は、受験者数の少なかった DT 群を除いた他の大学でも同様である。

次に、領域ごとの得点と合計点との相関係数を表 12、表 13、表 14 に示す。表 12 での合計点は、多肢選択式得点と記述式得点の和であり、表 13 での合計点は、該当する領域の得点を除いて多肢選択式得点と記述式得点の和をとったものである。また表 14 での合計点は、表 13 と同様に該当する領域の得点を除き、さらに領域間の配点の相違の影響を除去

図6 領域別にみた多肢選択式と記述式の正答率の特性



するために各領域の満点を揃えて多肢選択式得点と記述式得点の和をとったものである。合計点は、本研究で用いた試験問題によって測定された国語の総合的学力を表すものと考えられるが、ここでのねらいは、その総合的学力と、個々の大問で測定された学力とがどのような関連をもっているかを検討すること

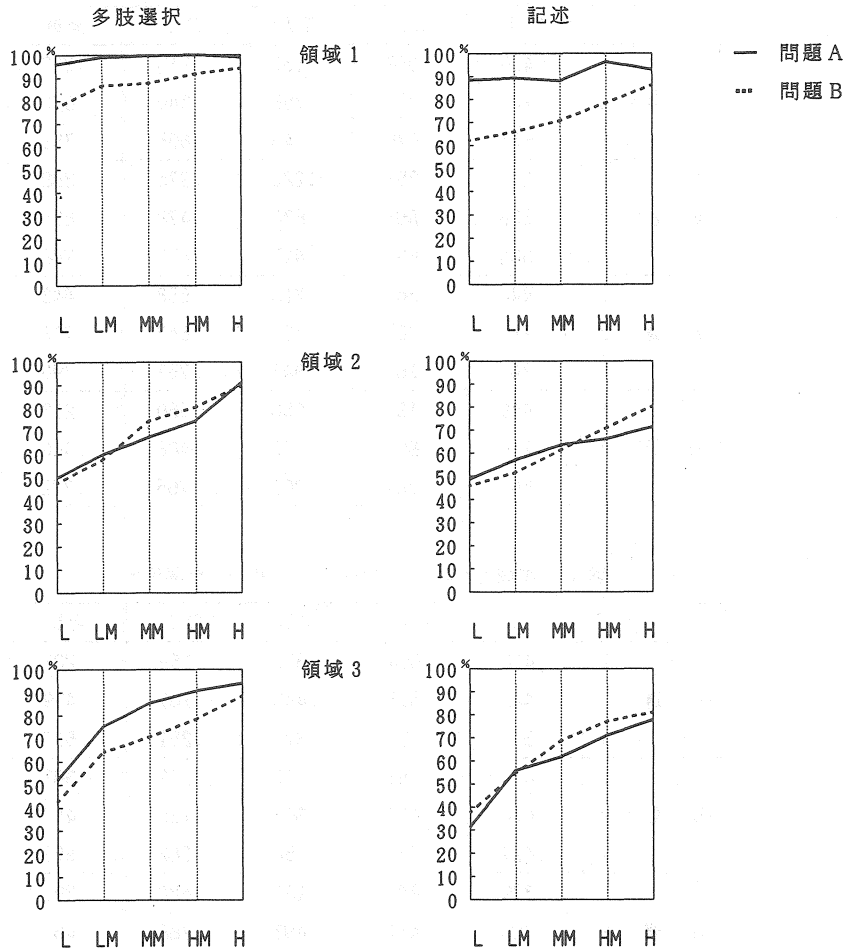
である。

まず全体としては、表13、表14に現れた相関は、表12のそれよりも全て小さくなっており、負の値もいくつか現れている。表12の相関は、自分自身を含んだ合計点との相関であり、その影響がかなり強く現れていることがわかる。配点の影響(表13、表14)は、特に

表11 多肢選択式合計点と記述式合計点との相関係数

	T J	G K	T D	D T	全員
A 選 B 記	0.624	0.529	0.344	0.246	0.557
B 選 A 記	0.428	0.521	0.544	0.346	0.510

図7 領域別にみた問題Aと問題Bの正答率の特性



配点の低い領域1(漢字)によるものが大きいと予想されるが、その配点を高めても領域1, 2の合計点に対する相関には大きな変化は認められない。本研究で用いた試験問題に関しては、配点の影響はそれほど大きくないといえよう。

次に、領域別にみてみよう。まず領域1(漢字)に関しては、全体的に相関が低い。その原因としては、先にも述べたように、領域1の平均点が極めて高かったことが考えられ、そのため被験者間の学力の差異を識別しにくかったことによると思われる。そのことは、2

つの試験問題の中ではより難易度の高い問題Bにおいて、相関がより高く現れていることから示唆される。

領域2(現代文)と領域3(古文)では、領域3の方が相関が高く現れる傾向がみえる。これは、とくに全体集団の場合に明確に現れており、全てのケースで0.5をこえる相関(表13, 14)を示している。領域1~3で構成される国語の総合的学力に関しては、領域3(古文)の影響が最も強いことが示唆される。また、多肢選択式と記述式との比較では、必ずしも一定した傾向はみられないが、A記領域

表 12 領域得点の自分自身を含む和との相関係数

		T J	G K	T D	D T	全員
A 選	1	.426	.089	.330	.215	.222
	2	.725	.757	.755	.340	.672
	3	.665	.676	.645	.695	.751
B 記	1	.197	.258	.223	.376	.388
	2	.829	.683	.630	.478	.664
	3	.664	.693	.497	.653	.788
B 選	1	.440	.360	.213	.658	.443
	2	.711	.700	.732	.643	.708
	3	.742	.762	.843	.753	.799
A 記	1	.449	.130	.050	.560	.213
	2	.214	.562	.573	.408	.468
	3	.665	.787	.701	.765	.772

表 13 領域得点の自分自身を除いた和との相関係数

		T J	G K	T D	D T	全員
A 選	1	.410	.064	.302	.169	.201
	2	.442	.513	.443	-.101	.439
	3	.375	.391	.371	.251	.517
B 記	1	.075	.156	.115	.272	.302
	2	.674	.419	.303	.150	.457
	3	.427	.473	.154	.282	.552
B 選	1	.379	.299	.167	.628	.391
	2	.404	.461	.493	.288	.459
	3	.406	.526	.646	.485	.567
A 記	1	.375	.079	-.002	.531	.160
	2	-.068	.336	.325	.198	.232
	3	.352	.534	.449	.509	.529

2 の相関が表 12～表 14 を通じて一貫して低く現れる傾向がみえる。A 選領域 2 の相関が、B 選領域 2 の相関と比較してそれほど低くないことから、問題 A の領域 2 に関しては、多肢選択式から記述式への書き換えによって、内容的な変化があったことが示唆される。このことは、問題 A 領域 2 における記述式への書き換えが、特に得点の高い層で識

別力の低下をもたらしたこと（前項参照）に対応していよう。

V. 項目レベルでみた多肢選択式と記述式の特徴の検討

1. 分析のねらいと方法

分散分析を通して、テスト全体および領域

表 14 領域得点率の自分自身を除いた和との相関係数

		T J	G K	T D	D T	全員
A 選	1	.353	.052	.218	.247	.190
	2	.376	.490	.460	-.101	.421
	3	.294	.393	.323	.270	.510
B 記	1	.073	.153	.099	.304	.296
	2	.731	.389	.285	.143	.443
	3	.386	.424	.201	.318	.552
B 選	1	.362	.294	.172	.635	.388
	2	.503	.430	.513	.302	.466
	3	.415	.506	.610	.510	.559
A 記	1	.360	.090	-.001	.544	.168
	2	-.052	.343	.283	.235	.221
	3	.343	.534	.418	.560	.525

配点

領 域	A	B
1	10	10
2	33	35
3	39	42
合 計	82	87

レベルで、多肢選択式と記述式の形式の違いによる平均点の差異を見出すことができた。また、2群のテスト集団 P1 と P2 は等質の能力集団であると仮定することも妥当であると考えられたので、この章では、第 IV 章で得られた知見に基づき、項目レベルでさらに深く考察を進めていくことにする。

まず、2群のテスト集団 P1 と P2 についてテスト合計点(P1: A 選+B 記, P2: A 記+B 選)を算出する。そして、その得点によって5群に分類し、各群の項目正答率を算出し、その正答率を折れ線で結んだものを項目特性曲線とよぶことにする。分析では、この項目特性曲線と項目正答率(多肢選択式項目正答率 P_m , 記述式項目正答率 P_w)によって、分散分析で得られた知見を吟味する。また、多

肢選択式で出題した場合と記述式で出題した場合の特徴の違いはどのようなものであるかを誤答の分布やその内容あるいは出題内容等の側面から裏付けをしていくことにする。

以下、領域別に領域1(漢字)、領域2(現代文)、領域3(古文)の順に分析を進めていく。

2. 領域1: 漢字について

既に領域レベルにみたとき、① 問題 A は問題 B より易しいこと、② 多肢選択式は記述式より易しいこと、③ 問題の内容あるいは解答形式によらず総じて漢字の設問は易しく正答率が高いこと、等の特徴が指摘された。

領域1の漢字の出題は問題 A および問題 B 各5題、合計10題出題された。これらの項

目特性曲線を描いたのが図8である。また、その項目正答率を示したのが表15である。

図8および表15に示した項目正答率や項

目特性曲線に加え、その誤答内容を吟味しながら、多肢選択式と記述式との差異に関する特徴をまとめると以下のようなになる。

図8 領域1(漢字)に関する項目特性曲線

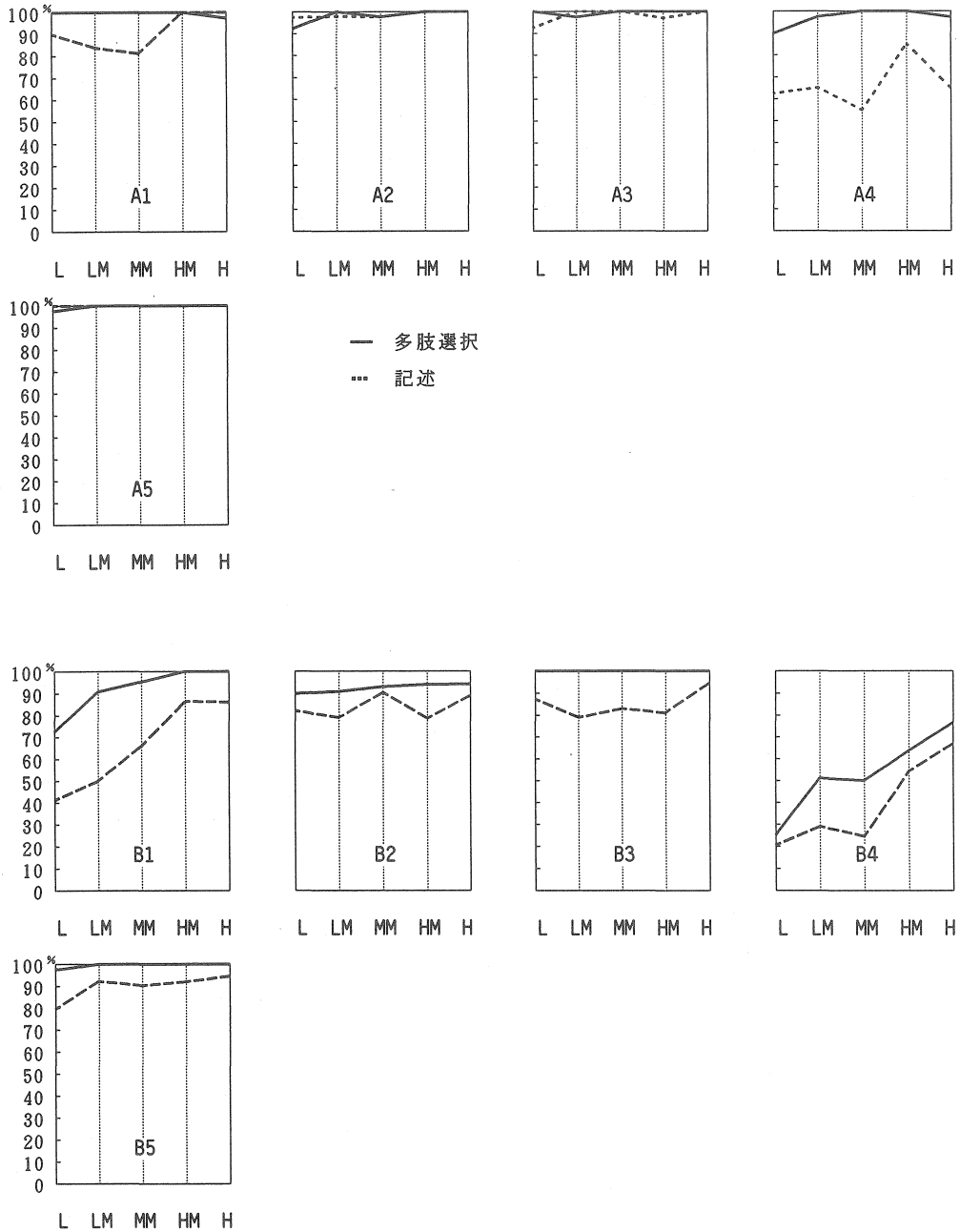


表 15 領域 1 (漢字) に関する項目正答率

No	項目	内容摘記	配点	多肢選択	記述
A1	第 1 問 問 1 (ア)	(頑) 丈	2	99.5 %	91.7 %
A2	(イ)	延 (長)	2	97.9	98.4
A3	(ウ)	優 (劣)	2	99.5	97.9
A4	(エ)	語 (感)	2	96.9	65.6
A5	(オ)	(納) 得	2	99.5	100.0
B1	第 1 問 問 1 (ア)	(異) 同	2	91.1 %	65.4 %
B2	(イ)	依 (然)	2	92.2	83.8
B3	(ウ)	驚 (異)	2	100.0	84.8
B4	(エ)	例 (証)	2	52.1	38.7
B5	(オ)	硬 (直)	2	99.5	89.5

- (1) 小学校学習指導要領の学年別漢字配当表に照らし合わせてみても易しい漢字であれば、多肢選択式であろうとも記述式であろうとも、ほぼ全ての者が解答できる。

多肢選択式および記述式のいずれにおいても項目正答率が高く、またいずれも識別力が非常に低い特徴をもった項目群として、A1, A2, A3, A5, B2, B5 がある。これらの項目は、能力の差を識別せず、ほぼすべての被験者が回答できた非常に易しい項目である。国語が試験の始めに実施されること、また、その中で漢字の書き取りの設問が最初に出会う問題であることから、取り組みやすい漢字が出題されたものと考えられる。実際、小学校学習指導要領の学年別漢字配当表に照らしあわせてみても易しい漢字である。これらの項目は、領域レベルの分散分析の結果にはほとんど影響を与えていない。

- (例 1) 易しい漢字の場合

[正答率 多肢選択式: 99.5%
記述式: 91.7%]

A1: 傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を、次の各群のうちから選べ。(多肢選択式)

頑丈 ① 上 ② 丈
③ 情 ④ 状 ⑤ 場

A1: 傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。(記述式)

ガンジョウ ()

- (例 2) 易しい漢字の場合

[正答率 多肢選択式: 97.9%
記述式: 98.4%]

A2: 傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を、次の各群のうちから選べ。(多肢選択式)

延長 ① 延 ② 円
③ 縁 ④ 演 ⑤ 沿

A2: 傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。(記述式)

エンチョウ ()

- (2) 多肢選択式の誤答となる選択肢の内容によって、多肢選択式と記述式の正答率に大きな差が生じる可能性がある。

例えば、記述式の方が多肢選択式に比べかなり正答率が下がる項目がある（A4, B1, B3, B4）。その原因としては、記述式で誤答となる頻度の高い漢字が多肢選択式の選択肢として用意されておらず、そのことが多肢選択式ではまよわしとはならず正答率を高めたものと推測される。多肢選択式で、記述式で誤りやすい漢字を誤答選択肢として用意しておれば、両者の正答率は大きな差が生じなかったものと思われる（B4）。領域レベルの分散分析において、多肢選択式が記述式に較べ易しいことが認められたが、これらの項目が影響したものと思われる。

- (例 3) 多肢選択式の方が記述式より正答率が高くなる場合

〔正答率 多肢選択式：96.9%
記述式： 65.4%〕

A4：傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を、次の各群のうちから選べ。（多肢選択式）

ゴカン ① 後 ② 誤
③ 護 ④ 語 ⑤ 互

A4：傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。（記述式）

ゴカン（ ）

A4 は、正答が「語（感）」で、多肢選択式の正答率は 96.9%，記述式では 65.6% である。記述式では五カンとした者が 61 人（33.3%）いた。おそらく、五感からきた誤りであろう。この「五」は、多肢選択式で

選択肢として提示されていないため、正答率が高く現れたものと思われる。

- (例 4) 多肢選択式の方が記述式より正答率が高くなる場合

〔正答率 多肢選択式：100.0%
記述式： 84.8%〕

B3：傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を、次の各群のうちから選べ。（多肢選択式）

キョウイ ① 協 ② 競
③ 興 ④ 共 ⑤ 驚

B3：傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。（記述式）

キョウイ（ ）

B3 は、正答が「驚（異）」で、多肢選択式の正答率は 100.0% で記述式では 84.8% である。多肢選択式では全員が正答であったが、記述式では約 25 人（13.1%）の者が誤答した。記述式の誤答の内容をみると、全ての者が多肢選択式の選択肢として用意されていない漢字を書いていた。特に、「恐」や「脅」がそれぞれ同じ 11 人（5.8%）存在していた。このことから、多肢選択式の設問における正答以外のまよわしの選択肢が必ずしも有効に作用せず、結果として多肢選択式の正答率が高くなったものと推測される。

- (例 5) 多肢選択式の方が記述式より正答率が高くなる場合

〔正答率 多肢選択式：52.1%
記述式： 38.7%〕

B4：傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を、次の各群のうちから

ら選べ。(多肢選択式)

レイショウ ① 冷 ② 励
③ 例 ④ 礼 ⑤ 霊

B4: 傍線部は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。(記述式)

レイショウ ()

B4は、正答が「例(証)」で、多肢選択式の正答率は52.1%で記述式では38.7%である。両形式とも低い正答率であった。この「例(証)」は、日本語教育基本語彙の中にも含まれておらず、やや難しい語彙であった。記述式での誤答内容をみると、誤答者95人のうち、多肢選択式で用意されている選択肢である「励」が59人(30.9%)、「冷」が17人(8.9%)、「礼」が14人(7.3%)、「霊」が1人(0.5%)の計91人となっており、ほぼすべての者が多肢選択式の選択肢で用意した誤答を記述していた。このような“表音文字化”の傾向に沿った、記述式でも誤

りやすい同音異義語を選択肢として用意したことが、多肢選択式の正答率を低下させたものと考えられる。

3. 領域2: 現代文について

領域2の現代文の出題は、問題Aおよび問題B共に6題、合計12題出題された。これらの項目特性曲線を描いたのが図9である。また、その正答率を示したのが表16である。

領域レベルにみたとき、分散分析の結果、①問題A、B間では難易度、識別力とも大きな差がないこと、②問題A、Bとも多肢選択式と記述式の難易度の差が大きいこと(ただし、識別力においては多肢選択式と記述式は同じである)、等の特徴が指摘された。領域2(現代文)では、多肢選択式から記述式への変換の問題が大きな焦点となっていることが示唆される。

そこで、領域2(現代文)に関しては、多肢選択式から記述式への変換過程を中心に、両形式を比較した図9の項目特性曲線や表16

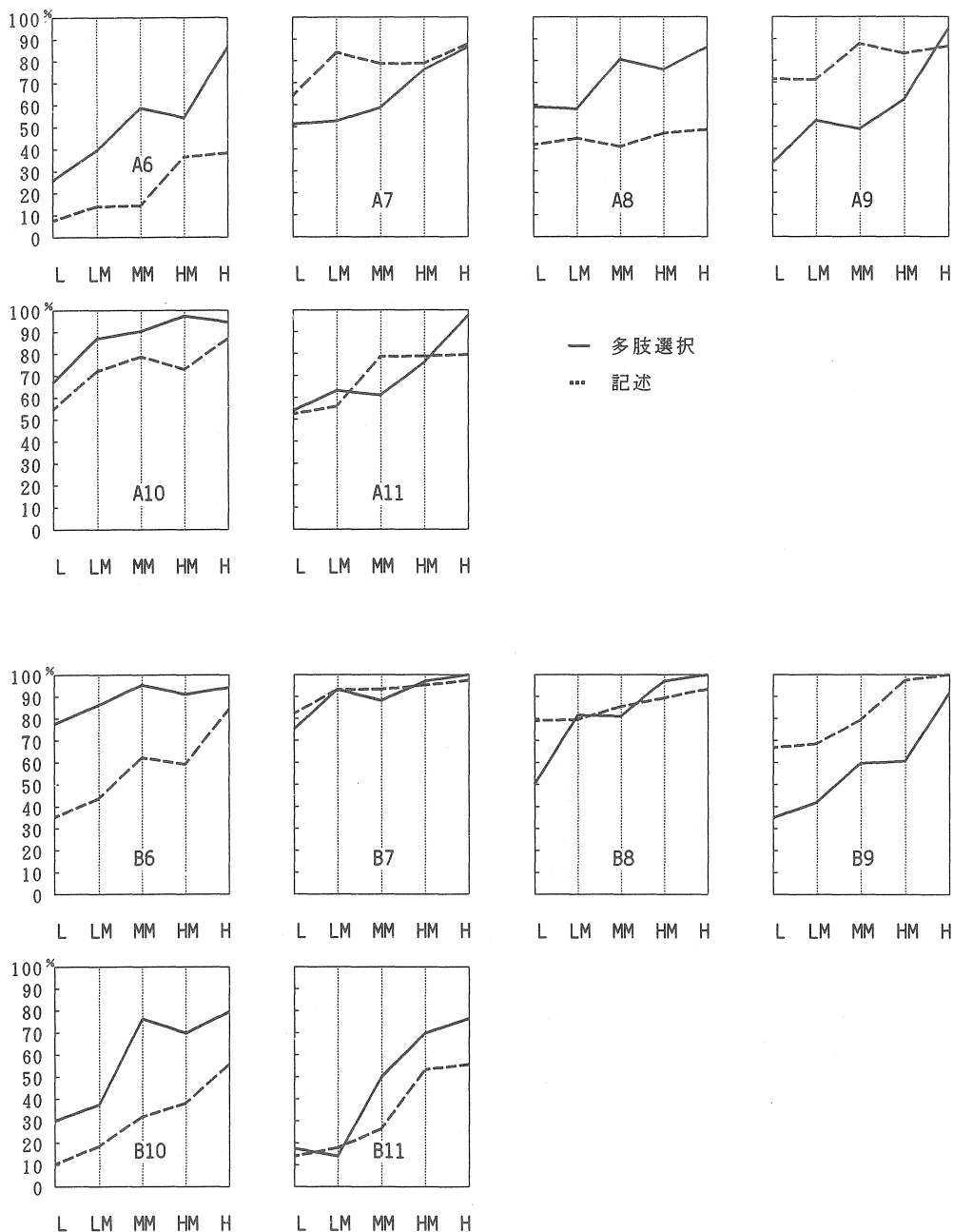
表16 領域2(現代文)に関する項目正答率

No	項目	内容摘記	配点	多肢選択	記述
A6	第1問 問2	趣旨	5	52.4 %	20.8 %
A7	問3	文の解釈	5	64.4	78.1
A8	問4	趣旨	6	71.7	44.2
A9	問5	趣旨	5	57.6	79.5
A10	問6	意味	6	87.4	72.5
A11	問7	説明	6	69.6	68.2
B6	第1問 問2	読解	7	88.5 %	56.4 %
B7	問3	読解	5	90.1	92.1
B8	問4	読解	5	80.7	85.1
B9	問5	読解	6	56.3	82.0
B10	問6	読解	5	57.3	30.4
B11	問7	読解	7	43.2	32.8

の項目正答率を吟味しながら、多肢選択式と記述式の違いを検討することにした。以下はその検討結果をまとめたものである。

- (1) 多肢選択式の正答率は、指示内容とそれを説明する文（正答文）が同一段落にあれば正答率は高く、異なった段落にあれば正

図9 領域2（現代文）に関する項目特性曲線



答率は低くなる傾向にある。(表 17)

(2) 多肢選択式から記述式への変換の仕方によって、両形式間の正答率の差は異なる。

ここでは、① 概ね多肢選択式に沿って変換した場合と、② 多少のヒントや解答方法を変更した場合、の 2 つの側面から両形式間の正答率の差異について検討する。

(a) 概ね多肢選択式に準じて記述式に変換した場合、両形式間の正答率の差異は、指示内容を説明する文（正答文）が所在する段落の異同と多肢選択式における誤答のまぎらわしさの程度によって生じる。

例えば、多肢選択式で選択肢に指示内容を説明する上で正答にあまり関連がなさそうなまよわしを用意した場合、① 指示文とそれを説明する文（正答文）が同一の段落内に存在するのであれば、両形式の正答率は高めに現れ、かつ多肢選択式と記述式の正答率は拮抗する傾向にあり、また、② 指示文とそれを説明する文（正答文）が異なる段落にある場合には、両形式の正答率は低めに現れ、かつ多肢選択式の方が記述式に比べ正答率はやや高くなる傾向にあ

る。

一方、③ 多肢選択式で選択肢に指示内容を説明する上で正答と関連しそうなまよわしを用意した場合、両形式の正答率は高めに現れ、かつ多肢選択式の方が記述式に比べ正答率はやや低めになる傾向にある。このことを示した表が表 18 である。

(例 6) ① の場合

〔正答率 多肢選択式：90.1%
記述式： 92.1%〕

B7：傍線部「近代化を西欧化と等置して単線的に理解する従来の見方」とあるが、そうでない見方のものはどれか。次のうちから一つを選べ。(多肢選択式)

- ① 近代化にはさまざまな形態があると考える。
- ② 西洋の近代にどれだけ接近しているかを重視する。
- ③ ソビエト社会の形成過程を標準として、他の社会を検討する。
- ④ 資本主義社会のような一定の社会構造を近代化の目安として考える。

表 17 多肢選択式項目の正答率

指示内容とそれを説明する文（正答文）が同一段落	指示内容とそれを説明する文（正答文）が異なる段落
A7 : 64.4 %	A6 : 52.4 %
A8 : 71.7	B9 : 56.3
A9 : 57.6	B10 : 57.3
A10 : 87.4	B11 : 43.2
A11 : 69.6	
B6 : 88.5	
B7 : 90.1	
B8 : 80.7	

表 18 多肢選択式と記述式の項目正答率の比較

選択肢 \ 正答文	指示内容とそれを説明する文が同一段落にある	指示内容とそれを説明する文が同一段落にない
まぎらわしい誤答選択肢なし	多肢選択式≒記述式 ① B7: 90.1% 92.1% B8: 80.7% 85.1%	多肢選択式>記述式 ③ B10: 57.3% 30.4%
まぎらわしい誤答選択肢あり	多肢選択式<記述式 ② A7: 64.4% 78.1%	

⑤ 近代化には決まった段階があり、国によって進度は異なるものと考え
る。

B7: 傍線部「近代化を西欧化と等置して単線的に理解する従来の見方」とあるが、そうでない見方とはどのような見方か、文中の語句を用いて書け。(記述式)

()

指示内容を説明する文は、指示文がある段落と同一段落内にあり、多肢選択式における誤答のまぎらわしさもそれほどではなく、このことが両形式の正答率を高め拮抗したものと思われる。

(例 7) ② の場合

[正答率 多肢選択式: 64.4%
記述式: 78.1%]

A7: 傍線部「子規の身体の状態は、この句になんらの決定的な影響を及ぼしてはいないのである。」とあるが、筆者がそのように考えた理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。(多肢選択式)

① 子規の病状はほぼ安定しており、鶏頭との精神的一体化は、実際の病状とは無関係になされたといえるので。

② 子規が鶏頭と一体化し、鶏頭の健康な生命力を表現しえたのは、病状のよしあしと直接には関係ないので。

③ 子規が病床にあったことは事実だが、鶏頭と見事に一体化することによって、病気を忘れることができたので。

④ 子規が精神的に鶏頭と一体化しえたのは、すでに死を覚悟し、病気とは無縁の境地に到達していたので。

⑤ 俳句はもともと、作者の身体の状態とは切り離されたところに成立するものであり、病気とは無関係なので。

A7: 傍線部「子規の身体の状態は、この句になんらの決定的な影響を及ぼしてはいないのである。」とあるが、筆者がそのように考えた理由として最も適切な文を本文中から抜き出して書け。(記述式)

()

A7 の項目特性曲線を見ると、成績の中・

下位層で記述式の方が多肢選択式より正答率が上回っており、成績の上位層では両形式間で正答率の差はない。指示内容を説明する文は、指示文と同一段落にあり、成績が中・下位層においては、多肢選択式の選択肢から得る情報よりは、記述式によって文中から適切な説明文を取り出す方が容易であったことが示唆される。

(例 8) ③ の場合

〔正答率 多肢選択式： 57.3%
記述式： 30.4%〕

B10：傍線部「近代化の初心」にあたるものとして、次のうちどれが最も適当か。一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 西欧的な視座に立ち戻って、日本の「近代化」を実現していかななくてはならないとする決意。
- ② 「近代化」の諸指標が個人の解放や民主主義的諸原則の実現に向けてはたらいっているかどうか、という問題意識。
- ③ 「近代化」をあくまで学問の対象として考えるか、実践的に追求するかという原理的な問題についての判断。
- ④ 後進国の「近代化」、さらには古い伝統のある国の「近代化」という三つの問題を忘れてはならない、という自覚。
- ⑤ 西欧的な視座を排し、あくまでも日本独自の理念に照らして「近代化」を検証しようとする精神。

B10：傍線部「近代の初心」にあたるものを、文中の語句を用いて書け。(記述式)

()

指示内容を説明する文は、指示文がある段落とは離れたところにある。このため、多肢選択式においても正答率は低く、記述式でもさらに低い値となったものと考えられる。

(b) 多肢選択式を多少のヒントや解答方法を変更して記述式に変換した場合、ヒントや解答方法の変更の仕方によって両形式間の正答率の差は異なる。

(例 9) 正答文がある段落を具体的に示して範囲を制約した場合

〔正答率 多肢選択式： 88.5%
記述式： 56.4%〕

B6：傍線部「日本の学者や知識人はみずからの国家の『近代化』という実践的関心を内にもたざるをえなかった」とあるが、その理由として、次のうちから最も適当なものを一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 日本の社会科学は、明治いらい欧米の学問の摂取と影響のもとに形成されたが、歴史的事情によって、いちはやくその影響から脱し、日本の社会科学として自立することを要請されていた。
- ② 日本の社会科学は、近代国家としての日本の後進性・弱小性の克服を主要な課題としながらも、学問的基盤の弱さから、国家的独立と「富国強兵」という国家的要請にこたえることは困難であった。
- ③ 日本の社会科学は、近代国家としての日本の後進性・弱小性の克服という国家的要請に対応しつつ、学問の国家権力からの自立という課題を

追求する必要にせまられていた。

- ④ 日本の社会科学は、近代国家としての日本の後進性・弱小性の克服という天皇制国家の要請を否定しつつ、学問の国家権力からの自立という課題を追求しなければならなかった。
- ⑤ 日本の社会科学は、明治いらい欧米の学問の摂取と影響のもとにありながら、民主主義的諸原則の実現、個人の諸権利の貫徹という課題の追求においては、欧米の学問をしのいでいた。

B6: 傍線部「日本の学者や知識人はみずからの国家の『近代化』という実践的関心を内にもたざるをえなかった」とあるが、「みずからの国家の『近代化』という実践的関心」の説明を、第1段落中の語句を用いて書け。(記述式)

()

正答に関連した文は、指示文と同一段落にある。記述式の採点では部分点を採用することにし、7点(満点)は多肢選択式の正答、6点は満点の内容に余分な情報を付加したもの、5点は舌足らずの表現をしたもの、4点は国家的要請に対応しつつ学問の自立を求めたもの、3点は国家的養成と記入したもの、2点は学問の自立と記入したもの、等として採点した。結果は、部分点を与えたとしても、多肢選択式の方が記述式より正答率は高くなっている。『みずからの国家の『近代化』という実践的関心』を解釈するに際し、多肢選択式では選択肢の内容がヒントになったのに対し、記述式で

は文中の第1段落内に解釈する上で関連すると思われる情報が多くの確な判断がとれなかったことが、正答率の差異となって現れたものと思われる。

(例10) 正答文がある段落を具体的に示して範囲を制約した場合

[正答率 多肢選択式: 52.4%
記述式: 20.8%]

A6: 傍線部「純真無垢の心の状態が掴み取った一小宇宙の明瞭な認識」とあるが、この箇所の趣旨を簡潔に表す最も適当な語を、次の中から一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 敷衍 ② 創造
③ 思惟 ④ 移調
⑤ 写生

A6: 傍線部「純真無垢の心の状態が掴み取った一小宇宙の明瞭な認識」とあるが、この箇所の趣旨を適切に表現した語を、本文第2段落中から漢字2字を選び、それを書け。(記述式)

☐ ☐

多肢選択式で「趣旨を簡潔に表す適当な語を選べ」とあるところを、記述式では指示を「第2段落中から漢字2字を選び」と変更した。指示文が第1段落の先頭にあり、正答の「写生」は第2段落の末文にあることから、多肢選択式においても正答率が低くなった。ちなみに、記述式の誤答をみると、多肢選択式で用意した誤答選択肢に該当する語句を書いた者はわずか16人(8.3%)で、135人(70.3%)はそれ以外の語句を記入していた(その中で最も多かった語句は「無心」49人(25.5%)であった)。

その意味で、漢字の場合と同様に、多肢選択肢式における誤答選択肢に記述式で書かれた語句を用意していなかったことも、多肢選択式の正答率を下げたものと推測される。

(例 11) 解答方法を一部変更した場合
〔正答率 多肢選択式: 69.6%
記述式: 68.2%〕

A11: 傍線部「鶏頭の法則が顕現されている」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 鶏頭が常に十四五本群立して咲く性質こそ自然界の法則だ、という発見が明確に断定されている。
- ② 強健な鶏頭の美しさは病床にあってこそ見いだされるものである、という発見が大胆に表出されている。
- ③ 深紅に燃え立つ鶏頭の心象風景こそ思想のある風景だ、という発見がみごとに活写されている。
- ④ 無骨さ、平凡さ、ぶざまさこそ強健に群立する鶏頭の本質だ、という発見が明確に表現されている。
- ⑤ 鶏頭の力強い存在感と重量感こそ芸術的なレアリテを保証するのだ、という発見が明瞭に記述されている。

A11: 傍線部「鶏頭の法則が顕現されている」とあるが、「鶏頭の法則」が具体的に述べられている箇所を本文から抜き出して書け。(記述式)

()

多肢選択式で指示されている文意を少し

変更し、記述式では「『鶏頭の法則』が具体的に述べられている箇所を本文から抜き出して書け。」と書き直し、「鶏頭の法則」について具体的に記述してある箇所を問う設問にした。正答に関連した文は、指示文の直前にあり、同一段落にある。この場合、多肢選択式の誤答選択肢がまよわしとして効果を発揮し、多肢選択式の正答率を低めたと考えられる。

(例 12) 解答方法を一部変更した場合
〔正答率 多肢選択式: 71.7%
記述式: 44.2%〕

A8: 傍線部「名句があやうきに遊ぶ」は、ここではどのようなことを言っているのか。その趣旨として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 名句は、月並なうがちを導き出す危険を顧みず、精神的な冒険をあえて試みるところに得られるものだ。
- ② 名句は、月並なうがちを導き出す危険を顧みず、独断に陥るのを恐れない冒険心によって得られるものだ。
- ③ 名句は、読者に誤解される危険を承知の上で、好んで危険を求める精神の遊びに没頭するところに得られるものだ。
- ④ 名句は、読者に誤解される危険を承知の上で、生命を賭けるほどの精神の冒険を試みるところに得られるものだ。
- ⑤ 名句は、現実の遊びとは異なる遊びの精神に創造の機微があり、異次元の世界に遊ぶ冒険の上に得られるものだ。

A8: 傍線部「名句があやうきに遊ぶ」の中の「あやうきに遊ぶ」とはどういうことか。本文中からそれに該当する適切な語句を選んで書け。(記述式)

()

正答に関連した文は、指示文の前後にあり、記述式においても正答率は高いと考えたが、多肢選択式で71%、記述式で44%と記述式で低い正答率となった。記述式で『名句』を外したことが、題意を変えてしまい、その結果として記述式を難しくしたのかもしれない。ちなみに、記述式で部分点を与えず0点か6点の2値による採点をすれば、さらに正答率は下がりわずか1.6%になってしまったことから、その傾向がうかがえる。

③ 作者と鶏頭が一体となった感動を踏まえ、一気に鶏頭の本質そのものに肉薄した苦心のあとのうかがえる句である。

④ 「べし」は推定の助動詞だが、それに独自の解釈をほどこして断定の助動詞と同義に用いた、意欲的な句である。

⑤ 「べし」が推定か断定かは文学の世界とは別に次元の問題であることを痛感させる、確信に満ちた句である。

A9: 傍線部「『鶏頭の十四五本もありぬべし』というのは大変な断定なのだ。」とあるが、この場合の「断定」にはどのような意味が含まれているか、最も適切な語を本文中から選んで書け。(記述式)

()

(例 13) 解答方法を一部変更した場合

〔正答率 多肢選択式: 57.6%
記述式: 79.5%〕

A9: 傍線部「『鶏頭の十四五本もありぬべし』というのは大変な断定なのだ。」とあるが、どのような趣旨を述べたものか。最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。(多肢選択式)

① 他の一切のありようを否定し、鶏頭の理想像の確立に全力を傾注して新境地を切り開いた前衛的な大胆な句である。

② 鶏頭そのものの確信に触れた感動に発し、鶏頭のあるべき必然の相をとらえて揺るぎなく結実させた句である。

正答に関連した文は、指示文と同一段落にある。記述式では、題意が少し変わってしまっているが、多肢選択式のままだに指示内容の趣旨を本文中から選ばせると大変難しい設問になってしまうと考え、『断定』についての適切な語だけを本文から選ばせる方法に変えた。また、この項目には部分点を与えたが、採点結果は満点の5点(76.6%)と0点(18.8%)にほぼ集中し、部分点の効果はほとんどなく、その結果は資料A記に示す通りである。記述式において正答しやすいように設問の指示の仕方を工夫しすぎたため、記述式の正答率が多肢選択式より約20%上昇した。しかし、たとい正答率が上昇したとしても、項目A7やA9のように識別力が低下し学力差を識別しない設問になってしまっており、多肢選択式

表 19 領域 3 (古文) に関する項目正答率

No	項目	内容摘記	配点	多肢選択	記述
A12	第 3 問 問 1 (ア)	語の解釈	3	78.0 %	71.4 %
A13	(イ)	語の解釈	3	95.3	76.9
A14	(ウ)	句の解釈	3	83.8	61.7
A15	問 2	主語	6	74.9	37.3
A16	問 3	文の解釈	6	89.0	79.8
A17	問 4	文の解釈	6	75.4	35.1
A18	問 5	縁語関係にある掛詞	6	75.4	49.4
A19	問 6	読解	6	71.3	73.4
B12	第 3 問 問 1 (ア)	語の解釈	4	80.2 %	81.2 %
B13	(イ)	語の解釈	4	57.3	14.9
B14	問 2	助詞の用法	5	92.7	81.3
B15	問 3	読解	5	27.6	76.3
B16	問 4	読解	5	71.4	71.8
B17	問 5	文の解釈	5	41.7	40.4
B18	問 6	文の解釈	5	67.7	53.7
B19	問 7	掛詞	4	79.7	44.8
B20	問 8	読解	5	93.8	87.3

から記述式への変換の難しさが現れた結果となっている。

4. 領域 3: 古文について

領域レベルにみたとき、① 多肢選択式では問題 A は問題 B より易しく、逆に記述式では問題 A の方が問題 B より難しいこと、その結果、② 記述式が多肢選択式より難しくなったこと、が指摘された。

領域 3 の古文では、問題 A が 8 題、問題 B が 9 題、合計 17 題出題された。これらの項目特性曲線を描いたのが図 10 である。また、その正答率を示したのが表 19 である。

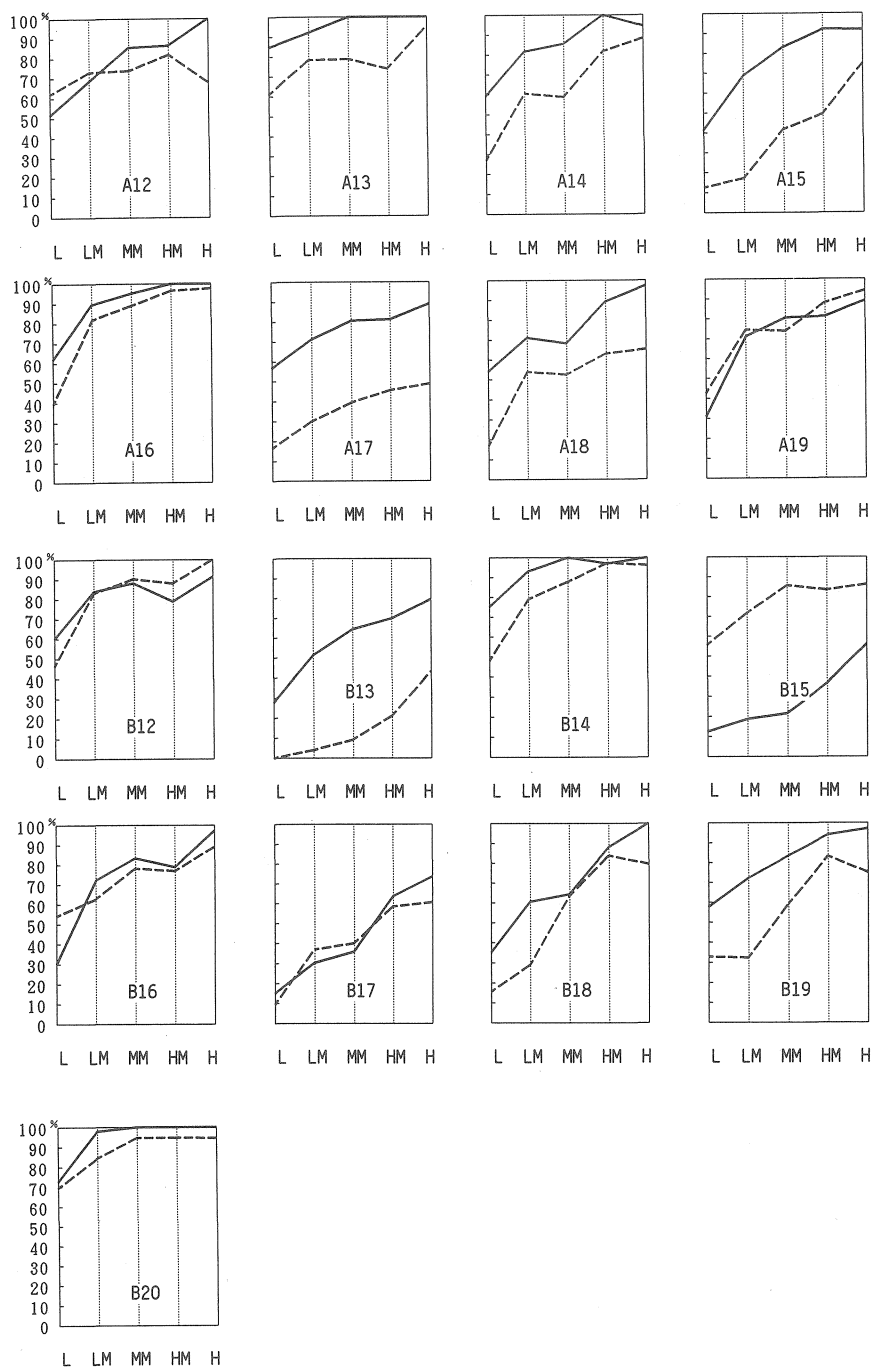
図 10 に示した項目特性曲線や表 19 の項目正答率から、古文の内容に関連して出題された項目について、多肢選択式と記述式との違

いを吟味する。古文における記述式への変換において留意したことは、多肢選択式で与えられた指示をそのまま利用すると、正答率がかなり低下するであろうと考え、ヒントや文意を若干変更した設問が多くなった点が、現代文と異なる。その点を考慮して吟味した結果は以下の通りである。

- (1) 正答が短い語句で答えさせる場合、多肢選択式と記述式の正答率の差異は、多肢選択式の誤答選択肢の内容に依存する。これは、漢字の書き取りの場合と類似している。また、難易の程度は、その語がいろいろな意味に使われるかどうか、現代語と古語との間で意味の違いがあるか否か、あるいはよく使われる語か否か等の性質によって定

図 10 領域 3 (古文) に関する項目特性曲線

— 多肢選択 ... 記述



まる。

(例 14) 両形式間の正答率が拮抗する場合

〔正答率 多肢選択式：78.0%
記述式： 71.4%〕

A12：傍線部「やがて」の解釈として、最も適当なものを次の各群から一つ選べ。(多肢選択式)

やがて ① しばらくして
② そのうち ③ その場で
④ あわてて ⑤ ゆっくりと

A12：傍線部「やがて」の解釈として、最も適当な内容を書け。(記述式)

()

A12 は「やがて」について語の解釈を問う設問である。記述式の採点では部分点を与え、3 点(満点)、2 点、1 点、0 点とした。多肢選択式では誤答として「そのうちに」(9.4%)、「しばらくして」(8.4%)を選ぶ者が多く、選択肢が有効に働いたことによって、多肢選択式と記述式の正答率が拮抗したものと推測される。

(例 15) 多肢選択式の方が正答率が高くなる場合

〔正答率 多肢選択式：79.7%
記述式： 44.8%〕

B19：傍線部 A「まだふみも見ず」の「ふみ」が「踏み」と「文」の掛けことばとなっているが、傍線部 B の和歌「ちはやぶる神の斎垣にあらねどもなみのうへにもとりゐたちけり」で、掛けことばをふくむものはどれか。次のうちから、一

つを選べ。(多肢選択式)

① ちはやぶる ② 神の斎垣に
③ あらねども ④ なみのうへにも
⑤ とりいたちけり

B19：傍線部 A の和歌では「まだふみも見ず」の「ふみ」が「踏み」と「文」の掛けことばとなっているが、傍線部 B の和歌で、掛けことばになっている部分(句)はどれか書け。(記述式)

()

B19 は掛詞についての設問である。選択肢に関する情報が呈示されていないので、多肢選択式より記述式の方が難しくなったものと考えられる。誤答選択肢がまよわしになった例である。

(2) 文を解釈して問う設問に関しては、多肢選択式と記述式の指示方法が類似しておれば、記述式の方が多肢選択式より難しくなる。しかし、記述式で工夫をして若干のヒントを与えた場合、両形式の正答率は拮抗する。

(例 16) 正答文内に語句を代入する方法に変更した場合

〔正答率 多肢選択式：71.3%
記述式： 73.4%〕

A19：傍線部「翁の言ふやう」とあるが、翁が自ら語った経歴に合致しているものを、次のうちから一つ選べ。(多肢選択式)

① 翁は山蔭中納言の末子であり、母は島の漁師の娘である。
② 翁は三歳で父母と死別し、十二歳

で一人いた兄にも先立たれた。

- ③ 翁は漁師の娘を妻とし、子も生まれたが、今は孤独の身の上である。
 ④ 翁は自ら髪をおろしながら、今日まで漁師の生活を続けていた。
 ⑤ 翁は山蔭中納言の子孫の父をもち、その形見の歌に心慰められていた。

A19: 傍線部「翁の言ふやう」とあるが、
翁が自ら語った経歴とはどういう内容であったか。(記述式)

翁は()の子孫の
 ()をもち、その形見の
 歌に心慰められていた。

A19は「翁の経歴」を文中から理解させる読解の設問である。記述式では、ヒントを与えない解答として空白欄を作ると正答率が非常に下がるのではないかと考え、カッコ内に適当な語句を入れる方法に変更した。結果は予想したとおり、多肢選択式と記述式の正答率はほぼ同じ程度になった。

(例 17) 解答方法を一部変更した場合

[正答率 多肢選択式: 92.7%
 記述式: 81.3%]

B14: 傍線部「小式部が歌のよきは、母の和泉式部によませて、ぬしになる」の解釈として、最も適当なものを一つ選べ。(多肢選択式)

- ① 小式部が歌に優れているのは、母の和泉式部が作った歌をうまく模倣するからだ、
 ② 小式部の歌で優れているのは、母の和泉式部によんでもらった歌を自

作として発表したものだ、

- ③ 小式部の歌で優れているのは、母の和泉式部が作った歌からうまい言いまわしを借りたものだ、
 ④ 小式部が歌に優れているのは、母の和泉式部に見せて出来のいいのを選んでもらうからだ、
 ⑤ 小式部の歌で優れているのは、母の和泉式部に見せて手を入れてもらったものだ、

B14: 傍線部「小式部が歌のよきは、母の和泉式部によませて、ぬしになる」の解釈として、小式部の歌で優れているのは、どのような理由によとしているのか、その理由を書け。(記述式)

()

B14は助詞『の』『が』の用法の理解に関する設問である。A19の場合と同様に解釈が容易にできるようなヒントを与えた。その結果、記述式では成績が中位の層から天井効果が現れ始め識別力のない設問となった。それが、両形式間の正答率の差異を小さくしたものと推測される。

(例 18) 解答範囲を限定した場合

[正答率 多肢選択式: 27.6%
 記述式: 76.3%]

B15: 傍線部「当座にことわりければ、中納言伏目になりて、」の解釈として、次のうちどれが最も適当か。(多肢選択式)

- ① 即座に答えたので、中納言はびっくりして
 ② さしあたりは断ったので、中納言

はがっかりして

③ その場で弁明したので、中納言は恥じ入って

④ 面前で断言したので、中納言は気おされて

⑤ 一時しのぎに言いわけをしたので、中納言はあきれて

B15: 傍線部「当座にことわりければ、中納言伏目になりて、」の解釈として、中納言が恥じいったのはどのような理由によるのか、その理由を書け。(記述式)

()

B15 は読解に関する設問である。多肢選択式が 28%、記述式が 76% と記述式の方がかなり正答率が高くなっている。誤答選択肢 ①「即座に答えたので、中納言はびっくりして」(64%) に誤答が集中しており、この誤答が正答のまよわしとしてよくきいており、誤答選択肢の設定の仕方の難しさを示す典型的な項目である。

VI. ま と め

分散分析を通して、テスト全体および領域レベルで、多肢選択式と記述式の形式の違いによる影響や内容の違いによる影響を吟味してきた。その際、2つの集団の等質性を確保するため注意深く被験者を選んだ。ここでは、さらに分散分析で得られた知見をもとに、項目レベルまで、より深く考察を進めていった。以下にその結果を要約する。

1. 2群の被験者集団間の等質性について

分散分析の結果、平均値に関しては、全体

として P1 群が P2 群よりやや高くなる傾向が認められ、国語の学力に関して 2つの集団は必ずしも等質でない可能性が示唆された。しかし、このことには、本研究で用いた実験計画が関連していることに注意する必要がある。つまり、P1, P2 群ともに、問題 A, B の 2種類の試験を受験しているが、それらは解答形式(多肢選択式、記述式)において異なっている。従って、2つの群は各々異なった試験問題を受けた可能性があり、2群の平均値の差異は、試験問題の差異に起因していると考えられることのできるのである。その意味で、本研究の手続きでは、2群の等質性を厳密に検証することは不可能である。しかし、少なくとも 2群の等質性に関しては、その手続きに十分な注意を払ったこと、そして実際、2つの群の合計点における差異は、各大学に共通して現れていることなどから、2つの被験者集団間の等質性を仮定することはそれほど問題ないと思われる。

2. 試験問題・解答形式間の比較について

分散分析の結果、全体で 1% 水準で有意差が認められた。つまり、全体としては、2つの試験問題 (A・B) は必ずしも等質でないと思われる。これは、主として多肢選択式における差異によるものと考えられる。

解答形式に関しては、全ての大学、そして全体で 1% 水準で有意差が認められた。記述式は多肢選択式に比べより難しいとの傾向が現れている。

また、交互作用については、全体集団、TD 大学において 1% 水準、そして TJ 大学において 5% 水準で有意差が認められ、問題 A は問題 B と比較して、多肢選択式から記述式への書換えによってより難易度が高まった傾向がみえた。例えば、全体集団における問題 B の多肢選択式と記述式の差は 7 点弱なのに対

して、問題 A では 14 点弱とほぼ 2 倍である。先に述べた、平均値に関して P1 群が P2 群より高くなる傾向は、P2 群が、書換えによってより難易度の高まった A 記を受験したことによるものと考えられる。実際、図 2 で示すように、多肢選択式より記述式の方が難易度が高いこと、多肢選択式では問題 B の難易度が高いが、記述式に変換された状態では 2 つの問題間の差が小さくなっていることが明確に読み取れる。

3. 領域ごとの試験問題・解答形式間の比較について

領域 1 (漢字) に関しては、全ての大学そして全体集団において、試験問題、解答形式とも 1% 水準で有意差が認められた。問題 B は問題 A と比較して、記述式は多肢選択式と比較してそれぞれ難易度が高い傾向にある。また、領域 1 に関しては、A 選、B 記、B 選、A 記の全てにおいて、平均点が高く、標準偏差が小さいことが特徴であった。

領域 2 (現代文) に関しては、解答形式の方により多くの大学で有意差が認められた。この傾向は、領域 3 (古文) においても同様であった。解答形式における有意差は、TJ 大学が 5% の他は全て 1% 水準で検出されており、その差異は領域 2 と比較してより明確である。多肢選択式の記述式への書換えによる難易度の高まりは、現代文、古文に共通して認められるものの、その傾向は古文において顕著である。しかも、その傾向は問題 A の方に強く現れている。

4. 相関分析

配点の影響は、特に配点の低い領域 1 (漢字) によるものが大きいと予想されるが、その配点を高めても領域 1, 2 の合計点に対する相関には大きな変化は認められず、本研究で

用いた試験問題に関しては、配点の影響はそれほど大きくないといえよう。

領域 1 (漢字) に関しては、全体的に相関が低い。その原因としては、先にも述べたように、領域 1 の平均点が極めて高かったことが考えられ、そのため被験者間の学力の差異を識別しにくかったことによると思われる。そのことは、2 つの試験問題の中ではより難易度の高い問題 B において、相関がより高く現れていることから示唆される。

領域 2 (現代文) と領域 3 (古文) では、領域 3 の方が相関が高く現れる傾向がみえる。これは、とくに全体集団の場合に明確に現れており、全てのケースで 0.5 をこえる相関を示している。領域 1~3 で構成される国語の総合的学力に関しては、領域 3 (古文) の影響が最も強いことが示唆される。また、多肢選択式と記述式との比較では、必ずしも一定した傾向はみられないが、A 記領域 2 の相関が一貫して低く現れる傾向がみえる。A 選領域 2 の相関が、B 選領域 2 の相関と比較してそれほど低くないことから、問題 A の領域 2 に関しては、多肢選択式から記述式への書き換えによって、内容的な変化があったことが示唆される。このことは、問題 A 領域 2 における記述式への書き換えが、特に得点の高い層で識別力の低下をもたらしたことに対応しているように。

5. 項目レベルにみたときの多肢選択式と記述式との比較

5.1 領域 1: 漢字について

- (1) 小学校学習指導要領の学年別漢字配当表に照らし合わせてみても易しい漢字であれば、多肢選択式であろうとも記述式であろうとも、ほぼ全ての者が解答できる。
- (2) 多肢選択式の誤答となる選択肢の内容によって、多肢選択式と記述式の正答率に大

きな差が生じる可能性がある。

例えば、記述式の方が多肢選択式に比べかなり正答率が下がる項目がある (A4, B1, B3, B4)。その原因としては、記述式で誤答となる頻度の高い漢字が多肢選択式の選択肢として用意されておらず、そのことが多肢選択式ではまよわしとはならず正答率を高めたものと推測される。多肢選択式で、記述式で誤りやすい漢字を誤答選択肢として用意しておれば、両者の正答率は大きな差が生じなかったものと思われる (B4)。領域レベルの分散分析において、多肢選択式が記述式に較べ易しいことが認められたが、これらの項目が影響したものと思われる。

5.2 領域 2: 現代文について

- (1) 正答が短い語句で答えさせる場合、多肢選択式と記述式の正答率の差異は、多肢選択式の誤答選択肢の内容に依存する。これは、漢字の書き取りの場合と類似している。
- (2) 多肢選択式から記述式への変換の仕方によって、両形式間の正答率の差は異なる。
 - (a) 概ね多肢選択式に準じて記述式に変換した場合、両形式間の正答率の差異は、指示内容を説明する文 (正答文) が所在する段落の異同と多肢選択式における誤答のまぎらわしさの程度によって生じる。
 - (b) 多肢選択式を多少のヒントや解答方法を変更して記述式に変換した場合、ヒントや解答方法の変更の仕方によって両形式間の正答率の差は異なる。

5.3 領域 3: 古文について

- (1) 正答が短い語句で答えさせる場合、多肢選択式と記述式の正答率の差異は、多肢選択式の誤答選択肢の内容に依存する。これは、漢字の書き取りの場合と類似している。また、難易の程度は、その語がいろいろな意味に使われるかどうか、現代語と古語との間で意味の違いがあるか否か、あるいはよく使われる語か否か等の性質によって定まる。
- (2) 文を解釈して問う設問に関しては、多肢選択式と記述式の指示方法が類似しておれば、記述式の方が多肢選択式より難しくなる。しかし、記述式で工夫をして若干のヒントを与えた場合、両形式の正答率は拮抗する。

以上、実験計画の妥当性を確認しながら、テスト全体、領域レベルさらには項目レベルと詳細に分析を試みてきた。いくつかの視点はすでに上で明らかにしたが、この分析全体を通して得られた主たる知見としては、限られた内容に関する試験問題であったが、ここで用いた内容に関するかぎり、多肢選択式であろうとも記述式であろうとも測定しようとしている学力は同一性の高いものであったということである。

(参考文献)

- 松井栄一・鈴木 孝 (1984) 記述解答方式と正答多肢選択解答方式のそれぞれの特徴と教育への生かし方 京都教育大学理科教育研究年報 Vol. 14

試験問題 A (昭和 63 年度)

第 1 問 次の文章を読んで、下の問 1～問 7 に答えよ。

鶏頭の十四五本もありぬべし 正岡子規

この句を支えているものは、純真無垢^{じゅんしんむこ}の心の状態が掴^{つか}みとった一小宇宙^{めいりよう}の明瞭な認識であって、そこには何の混乱も曇りもない。十四五本の強健^{きやうけん}ガンジョウな植物の群立が病子規の消えなんとする生命を圧倒すると西東三鬼^{さいとうさんき}は言う。これは「自己⁽¹⁾の生の深处に触れた」という誓子説^{せいし}のエンチョウの上に述べられたもので、面白い意見だが、死までにまだ三年を余す子規をあまりに瀕死⁽²⁾に追いこんでいるきらいがある。むしろ面白すぎる説である。「あわれ、鶏頭は十四五本もあるであろうか」と言う誓子があまりに病者の感傷にもたれすぎているのと同じように、三鬼も病者の論理を前提に置きすぎている。だが僕がこの句から受け取るものは、反対に健康さそのものであり、死病の床にあつてなお生きよう凝視^{めい}めよう描こうと願うたくましい意志だ。無骨に強健を誇る鶏頭に、子規の生命は圧倒されてもおびやかされてもいないし、まして狂っても混乱してもいないのである。むしろそのたくましさに子規の生命は憑^のり移っている。両者がたがいに映発し合っ^{あは}てて一体なのだ。それが子規の句の無邪気さであり、健康さであり、たくましさなのだ。誤解を怖れないで言ってみれば、子規^この身体の状態は、この句になんらの決定的な影響を及ぼしてはいないのである。

「鶏頭の十四五本」という句を敷衍^{ふえん}すれば、もちろん三鬼の言のごとく、まず無骨に強健を誇る植物の群立である。それとともに、雑然たる平凡なぶざまなありようである。「十四五本」と一括的にとらえられるのがふさわしいようなありようである。この言葉は、鶏頭の雑然と群立する相とともに、その相を無心な一括のもとに大きくとらえてしまう作者の側の主体的な掴み方をよく示している。鶏頭はまさに「十四五本もありぬべし」と言った具合に生えるものなのである。もちろんそのような言い方が月並的なうがちを導き出す危険をあえて承知^{がいにじよう}の上で言うのだが、名句^{めいこ}があやうきに遊ぶとは、すべて傑作は精神の冒険の上に摘み取られた崖上の花であるということである。賭けられたものは生命なのだ。そのような創造の機微がすべての鑑賞者に誤りなくとらえられるはずもあるまいが、そのことはまた、誤解される危険なくして芸術上の傑作が存在しえないことでもある。「鶏頭の十四五本もありぬべし」というのは大変な断定なのだ。こういう句を見ると、僕らはもう鶏頭について「十四五本もありぬべし」という以外のありようを想像できなくなる。それほど力をこの句は持っている。そう言えば、「ありぬべし」は文法上の推定であって断定ではないなどという理屈は吹っ飛んでしまうだろう。断定とは感動の重さなのだ。感動が実体的な、思惟^{しいうい}の刻印となって、僕らの前に突きつけられる。感動から物へ、物から核心へである。圧倒されたじたじとなるのは、作者でなくて読者なのだ。だからこの句の鶏頭は、現実の鶏頭以上に力強い存在性を獲得している。現実と作品との次元の相違を、人はこのような句によって学ぶべきだ。芸術における仮構とは、これ以外を意味しない。現実の世界から作品の世界への移調（トランスポジション）なくして、何の写生であろうか。

たとえば斉藤玄は、試みに「鶏頭の七八本もありぬべし」と作りかえてみる。そして、もし

子規がこう詠んだと仮定したら、「十四五本はやっぱり動かない」と言った楸 邨^{しゅうそん}は、この時は「七八本はやっぱり動かないと言うのではないだろうか。」と言っている。これは現実と作品との次元の相違を没却した混乱した議論である。だが考えてみれば、世の芸術鑑賞はこのような次元の取り違いの上に成立することが多いのである。玄はなお、「枯菊の十四五本もありぬべし」とも置きかえてみ、志摩芳次郎に至っては、「花見客十四五人は居りぬべし」「はぜ舟の十四五艘^{そう}はありぬべし」など愚句を並べたてて、鶏頭の句の揺るぎなさを否定しようとする。このような説は、芭蕉に習って、「汝等^{なんじら}が弁、皆理屈なり」とか「ただ、眼前なるは」とか言ってすましておいても構わないのであるが、玄はさらに「十四五本」と「七八本」と「どこにどう、どれだけの美しさの相違があるか、どれだけどちらが勝っているか、明瞭に断定できる方はやってみるといい」などと言っている。現実の鶏頭を対象として、「七八本」と「十四五本」とどちらが美しいか較^{くら}べるなぞは、庭師にでもまかせておきたまえ。どちらが美しいにしても、五十歩百歩だ。つまり現実世界のことなのだ。問題は、不安定な現実からトランスポートされた堅固な作品の世界なのだ。現実の鶏頭よりも現実的な、力強い存在性と重量感^{じやうりやうかん}を持って立っている作品の世界の鶏頭なのだ。そのことを前提としないかぎり「十四五本」と「七八本」とのユウレツ論はナンセンスである。だがひとたび問題を、このような世界に移してみれば、よほどゴカン⁽³⁾のにおいででないかぎり、あまりにも勝敗は明らかである。嘘^{うそ}と思ったら、舌頭に千転⁽⁴⁾してみるがよい。こう言うと、人は「七八本」と「十四五本」との音調的効果について言っているのだと思うかも知れないが、決してそうではない。本来言葉が持っている意味と音との合一の上にかもし出す不思議な効果について言っているのであって、これは古来のあらゆるすぐれた詩が間違いなく具^{そな}えているものであり、詩の鑑賞者が間違いなく受け取っているものであり、しかも誰もその秘密をとことんまで解明することはできなかったところのものである。そのような詩の効果を意識的に追求しようとしたのが、フランス象徴詩の運動だ。これから先のあらゆる議論は空論になる。このような創造の場所を信ずることができなかつたら、芸術などやめたらよい。それが信じられるなら、小ざかしい議論なぞ打ち切って、舌頭に千転して、「十四五本」の動かぬゆえんをナットク⁽⁵⁾することである。「プディンの試しは食ってみることだ。」

風景も作品として捕らえられた以上、ただの風景ではない、思想のある風景なのだ。むしろ外界に対する知覚が、思想を貧弱な独断から救うのだ。私はさきに断定と言ったが、断定とはまた発見の驚きでもある。鶏頭の無骨さ、平凡さ、ぶざまさこそ鶏頭の宿命に外ならぬという発見である。言いかえれば、「十四五本もありぬべし」というありようは、鶏頭そのものの自体なのだ。そこには、鶏頭の法則^{はうそく}が顕現^{けんげん}されていると言ってもよい。だからこの作品のレアリティを支えるものは、外界ではなく、外界に触れて発する作者の側の発見の驚異であり、ものの根源^{もと}まで見透^{とお}す作者の心眼であり、思想である。鶏頭以外の物象が、ここでは作者の眼に触れないのである。

「拙宅前庭葉鶏頭はやや末方に相成^{あいなりそうら}候へども鶏頭は日に増し善く相成り申^{もうしそうらう}候、赤の小菊うね昨今咲き満ちて愛すべく相成候。」(ホトトギス消息)。これは明治三十三年、すなわちこの句のできた年の十一月十一日の子規庵の景だ。だが子規の眼は大胆に小菊を捨て去り、葉鶏頭を抹殺する。そしてそれらあらゆる物象の不在の上に、深紅に燃え立つひとむらの鶏頭がそれ自身の存在と法則とを明らかにする。病床の子規の眼が爛々^{らんらん}と真っ赤に燃え立つ。たぐいなく鮮

やかな心象風景となって、一句に結晶するのである。

(山本健吉「俳句の世界」による)

問1 傍線部(1)～(5)は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。

- (1) ガンジョウ (2) エンチョウ (3) ユウレツ
(4) ゴカン (5) ナットク

問2 傍線部a「純真無垢の心の状態が掴み取った一小宇宙の明瞭な認識」とあるが、この箇所の趣旨を適切に表現した語を、本文第二段落中から漢字2字を選び出せ。

問3 傍線部b「子規の身体の状態は、この句になんらの決定的な影響を及ぼしてはいないのである。」とあるが、筆者がそのように考えた理由として最も適切な文を本文中から抜き出せ。

問4 傍線部c「名句があやうきに遊ぶ」の中の「あやうきに遊ぶ」とはどういうことか。本文中からそれに該当する適切な語句を選べ。

問5 傍線部d「『鶏頭の十四五本もありぬべし』というのは大変な断定なのだ。」とあるが、この場合の「断定」にはどのような意味が含まれているか、最も適切な語を本文中から選べ。

問6 傍線部e「現実の鶏頭よりも現実的な、力強い存在性と重量感を持って立っている作品の世界の鶏頭なのだ。」における、「現実」と「現実的」との意味の違いを考え、ここで言う「現実的」の語を説明している箇所を本文中から選べ。

問7 傍線部f「鶏頭の法則が顕現されている」とあるが、「鶏頭の法則」が具体的に述べられている箇所を本文中から抜き出せ。

第2問 西行の体験談という体裁で書かれた次の文章を読んで、下の問1～問6に答えよ。

過ぎぬる八月の初めつ方、西山の西住上人とともにひて、難波^{なにわ}のわたりを過ぎ^{はべ}侍りしに、折節、日ごとにうららかにて風も立ち侍らねば、釣り舟波に浮かびて、木の葉のごとく見ゆ。「いかに多くの魚を釣るらむ。あら無慙や。いざや、この舟に乗りて、かの魚のために念仏して、後世とはむ。」と^a言へば、「げに、しかるべし。」とて、遠浅はるかに歩み寄りて、「舟に乗せ給え。」と言ふに、「これは釣り舟にて、ほかへ行くべきにあらず。乗り給ひて、何の用か侍らむ。」と^b言ふ。あながちに言ひて、乗り侍りぬ。

さて、魚のためにひそかに念仏して、後世をとひ侍りき。かしこここの浦に寄りて、釣りするを見侍りしかば、何となく、

難波人いかなる江にか朽ちはてむ

とうち^Aすさみ侍るを、この西住上人、つけむとて、顔づゑつきてうちうめきけるに、釣りする翁^{おきな}のことのほかに年たけたるが、とりあへず、

あふことなみに身をつくしつ

とつけたるに、めづらかに覚えて、舟^Bにかしこくしひて乗り侍りて、かかる覚えぬこと聞きぬるうれしさよと思ふこと、たとへむ方なし。この翁も今はひたすら、釣りをやめて、連歌に心を入れ侍り。翁の句おもしろく侍りしかば、また思ひ寄りしは、

舟のうち波のしたにぞ老いにける

と言いたるに、またうち案じて、

海人のしわざもいとまの世や

と詠じ侍りき。たがひに詠じ侍りしほどに、日も西の山の端にかたぶきぬれば、海人の^{とまや}苦屋に漕ぎ戻して、今はいづちへも行くべきよし、翁に^{いとま}暇を乞ひ侍りしかば、「日も暮れぬ。」と、あながちにとどめしかば、かの翁の住みかに宿りて、昔今の物語し侍りき。

翁の言ふよやう、「われは山蔭^{やまかげ}の中納言とかや申し侍りける人のすゑに侍りけり。父にてありし人は、東やまの辺に住みて侍りけるが、世の中しわびて、この島に落ち留まりて、浦人の腹にわれを生ませて侍りけるが、われ三つと申しける年、父母ともにはかなくなり侍りき。その後は、母方の祖母なりし人にあひかかりて侍りしが、十二といふに、また彼にもおくれて侍りしかば、何とて今さら世の中を^{うば}経べきとも覚えて侍りしかども、魚を引きて命をつぐに侍り。憂き世の中の住み憂さに、髪おろして、いかならむ所にも侍らばやと思ひ侍るも、さすがに思ひ捨てて、ただ身一つを助けむとて、多くのものの命を断つことの心憂さ、今も、もとどり切らむと思ひ侍ること、一日にかならず二度、三度は思ひ出でて、涙のこぼるるなり。その折しも、父の具足の中に、何となき歌ども書き置き侍るを見て、心を慰むるに侍り。妻子といふものもなく、すでに五十年^{いそとせ}あまりの年を送り侍りき。おのおののありさまを見たてまつるに、ことにうらやましく侍り。われもともなひたてまつらむ。」とて、やがて手づからもとどり切りて、我が年ごろの住みかをば、日ごろ親しかりける人になむ取らせて、いざなひ連れて、行住と名づけて、むらなき後世者にて侍りき。

その後、都にのぼりて、西山のふもとに^{いおり}庵むすびて行ひ侍りけり。西仙上人と聞こえ侍りしは、この上人のことに侍りき。ゆゆしく行ひなりて、上人と仰がれ給へり。まことには、その品を言はば、くだれる人に侍らねども、海人の苦屋に生まれて、いねもせで、^{うしお}潮を汲みてこれを焼き、みるめを刈りて身を助け、網を引きて命を生きて、五旬のよはひを^へ経にける人の、にはかに^{ほつしん}発心し侍る、いとありがたきことには侍らずや。

(「撰集抄」による)

(注) 西山 — 今の京都市西北郊の山々。

山蔭の中納言 — 藤原山蔭(824-888年)。説話の世界などで有名な人物。

具足 — 所持品。

むらなき後世者 — 余念なく後世安楽を願う修行者。

問1 傍線部ア「やがて」、イ「年ごろの」、ウ「ゆゆしく行ひなりて」の解釈を書け。

問2 次に挙げる傍線部(1)～(5)の主語を書け。

(1)a「言へば」 (2)b「言ふ」 (3)c「うちすさみ侍るを」

(4)f「うち案じて」 (5)g「とどめしかば」

問3 傍線部d「つけむとて、顔づゑつきてうちうめきけるに」は、何をつけようとしたのか内容を書け。

問4 傍線部e「舟にかしこくしひて乗り侍りて、かかる覚えぬこと聞きぬるうれしさよ」の解釈を示す次の文を完成せよ。

舟に()強引に乗って、()

漁師の見事な句を聞いたうれしさよ

問5 傍線部 A・B の句に見える「江に」と「身をつくし」は、それぞれ「縁」および「滞標」(航路の目印に立てる杭)と掛けことばになっており、かつ「江」と「滞標」は縁語でもある。A・B の句には、このほかにも「江」「滞標」と縁語関係にある掛けことばがあるが、それは何か。

問6 傍線部 h 「翁の言ふやう」とあるが、翁が自ら語った経歴の内容を示す次の文を完成せよ。

翁は () の子孫の () をもち、
その形見の歌に心慰められていた。

試験問題 B (昭和 61 年度)

第1問 次の文章を読んで、下の問1～問7に答えよ。

いわゆる「近代化」論についての是非はともかくとして、近代化という観念をめぐる日本人学者と外国人学者との間の接近態度の違いの中に、日本の学問(とくにこの場合、社会科学としての歴史学)と欧米のそれとの社会的役割の違い、あるいはそこから導き出された学問としての性格の相違が、浮き彫りにされているように思う。とくに、この問題に関連して思い起こされることは、日本の近代的学問が形成されるにいたった歴史的事情である。つまり、日本の社会科学は明治いらい欧米の学問の摂取と影響のもとで形成され発展したにもかかわらず、近代国家としての日本の後進性・弱小性を当面の主要な課題とした天皇制国家のもとでは、「近代的」な学問を含めて、すべての市民的な営為が、国家的要請——たとえば国家的独立、「富国強兵」——と切り離しては考えられなかったこと、そしてさらに、そのことからしばしば由来する、学問の、国家権力への従属性にたいして、学問の自立性を回復し、学問を、現実の政治的権威や権力から自由な、ただ真理価値にのみ奉仕する世界に正しく位置づけるためにも、日本の学者や知識人はみずからの国家の「近代的」という実践的関心を内にもたざるをえなかったということである。こうして日本においては、近代化という観念は、ほとんど必然的といつてよいほどに、民主主義的諸原則の実現、あるいは社会生活や社会的諸関係における個人の諸権利の貫徹という価値意識や動機づけの問題と結びついて考えられることとなったのである。

換言すれば、「近代化」論においてしばしば近代社会の諸指標として、「官僚制化」・「工業化」・「都市化」および国民の読み書き能力の普及や政治参加の拡大、マスコミの発達等々が指摘されるが、それらの諸条件がそのまま近代化測定の尺度となりうるのではなく、要はそれらが、どれだけ国民個々人の人間的開放に向けてセットされているか、あるいは近代社会の諸制度・諸組織が、それを作り出した近代人の理念に添ってどれだけ機能しているか、という点が、日本ではとりわけ関心事とされたと言ってもよからう。

欧米の学者が、改めて近代化の概念構成に取り組むにいたった意図の一つには、近代化を西欧化と等置して単線的に理解する従来の見方を離れて、西欧の近代社会も近代化の一つの型にすぎないと考えよう、近代史の多角的・類型的なとらえ方と、その間の比較を可能とする

わく組みを作り上げようということがあった。たしかに近代を、資本主義社会あるいは社会主義社会というような、一定の構造連関をもった統一的な観念とする場合には、おのずから西欧先進資本主義国の歴史過程や、ソビエト社会の形成過程が、それぞれ範型とされ、それとの対比という視点からのみ他国、たとえば日本の歴史過程が検討され、その特殊性や、範型からの距離が、強調されるという傾向を生む。ここでは、社会構造を異にするアメリカとソ連とで共通に見られる現象 — たとえば工業化とか、社会組織の官僚制化とか、大衆社会化等々 — をとらえることが困難となったり、非西欧諸国における近代化の個性的な方向性を把握し、またそれら相互間のイドウドウを総合的に比較する視点が見いだしにくくならう。近代化=西欧化という従来の殻を破ろうとした外国の学者が、改めて近代化論を問題とするにあたって、同時に近代化の地域的な類型化 — たとえば西欧の先進諸国のように自生的に近代化の発生した社会と、日本や他の後進国のように外からの触発によって近代化過程に入った社会との区分、また欧州諸国や日本のように発達した伝統文化をもつ国と、アメリカやアフリカ諸国のように比較的文明の及んでいない土地に出現した若い社会等々の区分、ないしそれら相互の組み合わせによる類型化 — を試みようとしているのもそのためであろう。

しかし、それにもかかわらず、前述のように近代化の定義づけにあたって、近代の社会に見られる特徴的な諸現象を経験主義的に拾いあげつつ整理するという記述的方法を使用し、それらを指標にそれぞれの社会の近代化の態様を計量測定するという、この「近代化」論の対象への接近方法そのものには、イゼンとして、西欧の学者が非西欧的な異質な社会を外から「科学的」に認識する場合によく見られる経験科学的発想の痕跡が感じられてならないのである。とするならば、「近代化」論は、そのねらいはともあれ、やはり西欧的な視座と問題意識の域を出ていない、と言わざるをえないのではなかろうか。

ところで、戦後日本をこのような「近代化」論の視点から見た場合、それはたしかに、「キョウウイ的な発展」の記録であり、「平和と繁栄」のレイショウである、と評価することも可能であろう。しかし日本の歴史を、ほかならぬおのれ自身の民族の生活の歩みとして受けとめざるをえないわれわれにとって、そのような評価は、何か空々しい自己満足か、単なる外側からの冷たい「科学的」認識という感じをまねかれることができない。それは、日本の近代の内側にいるわれわれの、いわば生活感覚であり、また、近代化が明治いらい単なる認識の対象としてでなく、まさに実践的な課題であった日本の歴史感覚ともいえよう。

いや、そればかりではない。このようなわれわれの近代という内側の視座や、近代にたいする実践的なアプローチは、近代世界におくれて参加した日本に特殊な視座とのみ考えるのは、あまりにも自意識過剰と言うべきであろう。むしろ「近代化」論で指摘されたような近代の所産を、たえず近代の初心に照らして検証するというこの姿勢こそ、近代世界そのものにとって、みずからをそのコウチョク化から救い、近代のたえざる自己革新と再生とを保証するために、不可欠なものとさえ考えられるのである。そのような意味において、戦後日本の将来の展望も、日本の「近代化」を近代の初心に照らして検証しようとする視座が、戦後の思想において、どのように存在し、また展開したかを跡づけることを手がかりとして、開かれるのではなかろうか。

(松本三之介「近代日本の知的状況」による)

問1 傍線部(1)～(5)は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を書け。

- (1) イドウ (2) イゼン (3) キョウイ
(4) レイショウ (5) コウチョク

問2 傍線部a「日本の学者や知識人はみずからの国家の『近代化』という実践的関心を内にもたざるをえなかった」とあるが、「みずからの国家の『近代化』という実践的関心」の説明を、第1段落中の語句を用いて書け。

問3 傍線部b「近代化を西欧化と等置して単線的に理解する従来の見方」とあるが、そうでない見方とはどのような見方か、文中の語句を用いて書け。

問4 傍線部c「ここでは」の説明を本文中から抜き出して書け。

問5 傍線部d「近代の社会に見られる特徴的な諸現象」とあるが、それらの諸現象を3種類書け。

問6 傍線部e「近代の初心」にあたるものを文中の語句を用いて書け。

問7 日本の学問と西欧の学問の、それぞれの接近態度（アプローチ）の特徴を、文中の語句を用いて簡潔に書け。

第2問 次の文章を読んで、問1～問8に答えよ。

小式部が歌のよきは、母の和泉式部によませて、ぬしになる、と御所中に披露ありけり。内々口惜しと思ふところに、あるとき、また内裏に歌合ありけるに、小式部も人数に指されてけり。すでにその日近くなりけるころ、中納言定頼卿、かの局に來たりて、「御会の日も近くなり侍りぬ。歌はいかがさせ給ふ。丹後より使ひは来ずや。さぞ心もとなく思すらむ。」など、たはぶれて立たれけるとき、小式部引きとどめてよめり。

大江山いく野のみちの遠ければまだふみも見ず天の橋立
と、当座にことわりければ、中納言伏目になりて、いふべきことばもなくして立たれけり。これよりしてこそ、小式部、母がちからを借らざれども自身とよめるなりけり、と世の疑ひを晴らしけれ。

そもそもこの小式部は、幼きより和歌の道世人に優れたり。年十一のとき、母もろともに院の御供にて住吉へ参りけり。御法施はててのち、ここかしこ浦のけしき観覧ありて興ぜさせ給ひけるに、千鳥・かもめなど波にゆられたりしてゐ、おもしろく思しめして、「あの浮き鳥射て参らせよ。」と仰せごとありければ、北面の人々弓矢をもち波の上におりたちて、これをねらひけるけしき、まことに折からおもしろく観覧ありて、「このけしきを歌によむべし。」と、和泉式部に宣旨ありけり。式部承りて、「みづからが歌めづらしからず。ここに姫一人召し具しさぶらふ。かれによませて御覧あるべし。」と申しければ、「さらば」とて宣旨あり。姫、顔うち赤めながら、母のかたへ向かひて、「ちはやぶる」と申しければ、母、「それは」とてしかりけり。君、あやしく思しめして、「いかでさやうにはいさむるやらむ。」と仰せられければ、「神の御事にこそちはやぶるとは申すべけれ。これはあらぬことにてさぶらふものを。」と申しければ、「あしくとも、いとけなき者のことなり。苦しからじ。よませてきけ。」と仰せごとありければ、「さらばよむべし。」と母に許されて、

ちはやぶる神の斎垣にあらねどもなみのうへにもとりゐたちけり

君をはじめ、御供の公卿・殿上人、大きに感じ給ひけり。御感のおまりに色の御衣を下され、小式部の内侍と召されけり。母の心思ひやるべし。それより内裏に召されて、ときめきけり。

あるとき、君御寵愛の小松にはかに枯れければ、惜しみ思しめして、「草木も歌にはめづるならひなれば、和泉式部を召して松の祈りの歌よませてみるべし。」と仰せられければ、小式部、承りて、「母はただいまるなかに侍り。はるばると申してつかはしきぶらはむより、まづ試みにみづからよみて奉るべし。」と奏しければ、「いそぎよみて奉るべし。」と仰せありければ、承りてかの木のもとをめぐりて、

ことわりや枯れてはいかに姫小松千代をば君にゆづると思はば
かやうに詠じければ、この松、時の間に栄え、もとのごとくになりけり。君、大きに御感ありて、御衣かつげさせ給ひけり。このとき、各々そねみねたみて、「これは内々このことを知りて母の式部のよみし歌なり。」などあらぬさまに申しさたしけるを、いとはづかしく、口惜しく覚えける折ふし、かの御会の人数に指されて、名歌よまむと思ひけるところに、定頼の卿かやうに申されければ、さつそくよみて人々の疑ひを晴らしける。まことに名誉の歌人なるべし。

(「和歌威徳物語」による)

注 法施一神仏に物をささげて祈ること。

問1 傍線部ア「いとけなき」、イ「めづる」の解釈を書け。

問2 傍線部a「小式部が歌のよきは、母の和泉式部によませて、ぬしになる」の解釈として、小式部の歌で優れているのは、どのような理由によっているのかその理由を書け。

問3 傍線部b「当座にことわりければ、中納言伏目になりて」の解釈として、中納言が恥じいったのはどのような理由によるのか。

問4 傍線部d「しかりけり」とあるが、どうしてしかったと考えられるか。その理由を解釈した次の文の末尾を補え。

「ちはやぶる」は神に冠することばであって、

問5 傍線部e「母の心思ひやるべし」とあるが、その「母の心」はどのようなものであったと考えられるか。

問6 傍線部f「定頼の卿かやうに申されければ」とあるが、具体的にはなんと言ったのか。本文中よりその該当する箇所を抜き出して書け。

問7 傍線部Aの和歌では、「まだふみも見ず」の「ふみ」が「踏み」と「文」との掛けことばになっているが、傍線部Bの和歌で、掛けことばになっている部分(句)はどれか。

問8 傍線部Cの和歌は、誰に依頼し、そして実際には誰が詠んだものか。

資 料

A選

	出 所		内 容 摘 記		形式	配点	未修正 正答率 Pm (%)	ギルフォード 修正CP Pc (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)	誤 答 内 容 (%)			
A 1	昭和63年 本試験現代文	第1問 問1(ア) 1	漢字 (頑) 丈	5肢択 1	2	99.5	99.4	0.5			③ 情0.5			
A 2		(イ) 2	〃 延 (長)	〃	2	97.9	97.4	2.1			④ 演1.6	⑤ 沿0.5		
A 3		(ウ) 3	〃 優 (劣)	〃	2	99.5	99.4	0.5			④ 憂0.5			
A 4		(エ) 4	〃 語 (感)	〃	2	96.9	96.1	3.1			⑤ 互2.6	② 後0.5		
A 5		(オ) 5	〃 (納) 得	〃	2	99.5	99.4	0.5			② 督0.5			
A 6	子規	問2 6	趣旨 写生	〃	5	52.4	40.5	47.6			③ 思惟18.8	④ 移調17.3	② 創造9.9	① 敷衍1.6
A 7		問3 7	解釈 病状と無関係	〃	5	64.4	55.5	35.6			③ 18.8	① 7.3	④ 6.8	⑤ 2.6
A 8		問4 8	趣旨 名句断片の遊	〃	6	71.7	64.6	28.3			① 17.3	③ 8.9	② 1.6	⑤ 0.5
A 9		問5 9	趣旨 断定の趣旨	〃	5	57.6	47.0	42.4			⑤ 22.0	① 11.0	③ 6.8	④ 2.6
A10		問6 10 11	意味 「現実」と「現実的」との 意味の違い「現実的」	7 肢択 2 k=21	6	87.4	86.7	12.6			① n⑥ 3.1	① n⑥ 1.5	① n⑥ 7.8	
A11		問7 12	説明 鶏頭の法則の顕現	5 肢択 1	6	69.6	62.0	30.4			③ 18.3	⑤ 9.9	① 1.0	② 1.0
A12	昭和63年 本試験古文 西行	第3問 問1(ア)24	語の解釈 やがて	〃	3	78.0	72.5	22.0			② 9.4	① 8.4	④ 3.7	⑤ 0.5
A13		(イ)25	〃 年ごろの	〃	3	95.3	94.1	4.7			④ 2.1	③ 1.6	① 0.5	③ 0.5
A14		(ウ)26	句の解釈 舟は行くが	〃	3	83.8	79.8	16.2			④ 6.3	④ 5.2	⑤ 4.2	② 0.5
A15		問2 27	主語	〃	6	74.9	68.6	25.1			④ 19.4	② 3.7	① 1.0	③ 1.0
A16		問3 28	解釈 つれて … うめ討ふ	〃	6	89.0	86.3	11.0			① 6.3	② 2.6	④ 2.1	
A17		問4 29	解釈 舟は行く … うれは	〃	6	75.4	69.3	24.6			③ 17.3	⑤ 3.1	① 2.1	④ 2.1
A18		問5 30	縁語関係の掛詞 無みと波	〃	6	75.4	69.3	24.1	0.5		① 12.6	⑤ 5.3	② 3.2	③ 3.2
A19		問7 32	読解 翁の経歴	〃	6	71.3	64.1	28.3	1.6		① 14.7	④ 11.5	③ 1.6	② 0.5

A記

		出 所	内 容 摘 記	形 式	配点	正答率 Pe (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)	部 分 点 分 布 (%)						加重平均 得点率 Pw (%)	同左 SD
									0	1	2	3	4	5		
A 1	昭和63本試験現代文	第1問 問1(ア) 1	漢字 (頑) 丈	記述	2	91.7	4.7	3.6	8.3		—	—	—	—	91.7	27.6
A 2		(イ) 2	" 延 (長)		2	98.4	1.0	0.5	1.6		—	—	—	—	98.4	12.5
A 3		(ウ) 3	" 優 (劣)		2	97.9	1.0	1.0	2.1		—	—	—	—	97.9	14.3
A 4		(エ) 4	" 語 (感)		2	65.6	33.9	0.5	34.4		—	—	—	—	65.6	47.5
A 5		(オ) 5	" (納) 得		2	100.0					—	—	—	—	100.0	0.0
A 6	子規	問2 6	趣旨 写生		5	20.8	78.6	0.5	79.2					—	20.8	40.6
A 7		問3 7	解釈 病状と無関係		5	77.1	19.8	3.1	21.3			1.6		—	78.1	40.9
A 8		問4 8	趣旨 名句断りか遊ぶ	本文中から	6	※1.6	97.9	0.5	10.4	4.2		83.3	0.5		44.2	17.8
A 9		問5 9	趣旨 断定の趣旨		5	76.6	22.9	0.5	18.8		1.6	0.5	2.6	—	79.5	39.2
A10		問6 10 11	意味「現実」と「現実的」との 意味の違い「現実的」		6	71.9	22.4	5.7	27.1			0.5	0.5		72.5	44.4
A11		問7 12	説明 鶏頭の法則の顕現		6	68.2	25.0	6.8	31.8						68.2	46.6
A12	昭和63本試験古文	第3問 問1(ア)24	語の解釈 やがて		3	70.8	27.6	1.6	28.1	0.5	0.5	—	—	—	71.4	45.0
A13		(イ)25	" 年ごろの		3	72.4	27.0	0.5	17.7	6.3	3.6	—	—	—	76.9	39.5
A14		(ウ)26	句の解釈 舟は行くが		3	57.8	30.7	11.5	35.9	1.0	5.2	—	—	—	61.7	47.2
A15		問2 27	主語		6	33.9	65.1	1.0	60.9		0.5		4.2	0.5	37.3	47.2
A16		問3 28	解釈 つれて … うめ討死		6	72.4	17.7	9.9	15.1	2.1		4.2	1.6	4.7	79.8	37.1
A17	西行	問4 29	解釈 舟は行く … うめは		6	5.7	90.6	3.6	35.4		0.5	58.3			35.1	28.4
A18		問5 30	縁語関係ある掛詞 無みと波		6	7.3	87.0	5.7	42.2					50.5	49.4	42.4
A19		問7 32	読解 翁の経歴		6	73.4	23.4	3.1	26.6						73.4	44.2

B選

	出 所	内 容 摘 記	形式	配点	未修正 正答率 Pm (%)	ギルフォード 修正CP Pc (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)	誤 答 内 容 (%)				
B 1	昭和61年 本試験現代文	第1問 問1(ア) 1	漢字 (異) 同	5択択 1	2	91.1	88.9	8.9		③ 働 2.1	⑤ 道 1.6	④ 堂 0.5	
B 2		(イ) 2	" 依 (然)	"	2	92.2	90.3	7.8		② 以 6.8	③ 異 0.5	⑤ 意 0.5	
B 3		(ウ) 3	" 驚 (異)	"	2	100.0	100.0						
B 4		(エ) 4	" 例 (証)	"	2	52.1	40.1	47.9		② 励 4.3	④ 礼 1.6	⑤ 霊 0.5	
B 5		(オ) 5	" 硬 (直)	"	2	99.5	99.4	0.5		③ 肯 0.5			
B 6	近代化	問3 7	読解 自国近代化の実践的関心	"	7	88.5	85.6	11.5		④ 7.3	② 2.6	① 1.0	⑤ 0.5
B 7		問4 8	" 近代化= 西教化での見方	"	5	90.1	87.6	9.9		③ 3.6	⑤ 3.1	② 2.1	④ 0.5他0.5
B 8		問5 9	" 「これ」=統一的観念	"	5	80.7	75.9	19.3		① 9.4	④ 5.2	⑤ 3.1	③ 1.6
B 9		問6 10	" 近代社会の特徴的諸現象	"	6	56.3	45.4	43.8		④ 18.2	① 10.9	④ 10.4	③ 4.2
B10		問7 11	" 近代の初心	"	5	57.3	46.6	42.7		⑤ 21.4	③ 10.9	④ 6.3	① 4.2
B11		問8 12	" 日本の学問的アカデミーの特徴	"	7	43.2	29.0	56.8		④ 24.5	③ 14.6	② 9.4	⑤ 8.3
B12	昭和61年 本試験古文	第3問 問1(ア)21	語の解釈 いとけなき	"	4	80.2	75.3	19.8		③ 14.1	① 3.1	② 2.1	⑤ 0.5
B13		(イ)22	" めづる	"	4	57.3	46.6	42.2	0.5	⑤ 18.2	③ 16.7	① 6.3	④ 0.5
B14		問2(ウ)23	読解 小式部の歌がよい理由	"	5	92.7	90.9	7.3		① 2.6	④ 2.1	③ 1.6	⑤ 1.0
B15		問3 24	中納言が 恥じ入った理由	"	5	27.6	9.5	72.4		① 63.0	④ 7.3	② 1.0	⑤ 1.0
B16		問4 25	しかった理由	"	5	71.4	64.4	28.6		③ 13.5	① 10.9	④ 2.6	② 1.6
B17		問5 26	解釈 定綱卿の言の内容	"	5	41.7	27.1	58.3		② 31.8	① 15.1	⑤ 9.9	④ 1.6
B18		問6 27	掛詞 とり たちけり	"	5	67.7	59.6	32.3		② 15.1	④ 12.5	③ 3.6	⑤ 1.0
B19		問7 28	読解 依頼は人と詠は人	"	4	79.7	74.6	19.8	0.5	④ 14.6	② 2.1	③ 2.1	① 1.0
B20	小式部	問8 30	読解 翁の経歴	"	5	93.8	92.3	6.3		③ 3.1	⑤ 2.1	① 1.0	

B記

		出 所	内 容 摘 記	形 式	配点	正答率 Pe (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)	部 分 点 分 布 (%)							加重平均 得点率 Pw (%)	同左 SD
									0	1	2	3	4	5	6		
B 1	昭和61年 本試験現代文	第1問 問1(ア) 1	漢字 (異) 同	記述	2	65.4	33.5	1.0	34.5		—	—	—	—	—	65.4	47.5
B 2		(イ) 2	" 依 (然)		2	83.8	13.1	3.1	16.2		—	—	—	—	—	83.8	36.8
B 3		(ウ) 3	" 驚 (異)		2	84.8	13.1	2.1	15.2		—	—	—	—	—	84.8	35.9
B 4		(エ) 4	" 例 (証)		2	38.7	49.7	11.5	61.8		—	—	—	—	—	38.7	48.9
B 5		(オ) 5	" 硬 (直)		2	89.5	4.2	6.3	9.9		—	—	—	—	—	89.5	29.8
B 6	近代化	問3 7	読解 自国近代化の実践的関心		7	33.5	60.2	6.3	9.9	6.3	22.0	15.7	2.6	6.8	3.1	56.4	36.1
B 7		問4 8	" 近代化= 西欧化での見方		5	88.5	10.4	1.0	4.7		2.6	4.2		—	—	92.1	23.8
B 8		問5 9	" 「これ」=統一的観念 本文中から		5	83.2	14.7	2.1	13.6			3.1		—	—	85.1	34.5
B 9		問6 10	" 近代社会の特徴的諸現象		6	81.7	14.1	4.2	17.8			0.5			—	82.0	38.2
B10		問7 11	" 近代の初心		5	30.4	44.5	25.1	69.6					—	—	30.4	46.0
B11		問8 12	" 日本の学問的アナーキーの特徴		7	3.1	78.0	18.8	38.2		26.2		18.8	1.6	12.0	32.8	32.1
B12	昭和61年 本試験古文	第3問 問1(ア)21	語の解釈 いとけなき		4	79.1	17.8	3.1	16.7		4.2		—	—	—	81.2	37.7
B13		(イ)22	" めづる		4	12.6	75.9	11.5	82.7	1.0	2.6	1.0	—	—	—	14.9	34.1
B14		問2(ウ)23	読解 小式部の歌がよい理由		5	80.6	14.1	5.2	18.3			1.0		—	—	81.3	38.6
B15		問3 24	中納言が 恥じ入った理由		5	35.1	60.7	4.2	9.9	1.0	0.5	10.0	43.5	—	—	76.3	29.1
B16		問4 25	しかった理由		5	60.7	34.5	4.7	19.4	1.6	3.1	13.1	2.1	—	—	71.8	39.7
B17		問5 26	解釈 定積庵の言の内容		5	27.7	56.0	16.2	49.2	0.5	5.2	16.2	1.0	—	—	40.4	43.2
B18		問6 27	掛詞 とり たちけり		5	53.4	39.3	7.3	46.1			0.5		—	—	53.7	49.7
B19		問7 28	読解 依模山人と詠ば人		4	42.4	48.7	8.9	31.9	5.2	12.0	8.4	—	—	—	44.8	34.9
B20	小式部	問8 30	読解 翁の経歴		5	86.9	8.4	4.7	12.6				0.5	—	—	87.3	33.2

